

# 概況

## [歌舞伎]

## 2024年の歌舞伎界

## 小玉祥子

## ——中堅の活躍と新作の増加

老朽化による建て替えのため、2023年10月末に国立劇場が閉場した影響の大きさを痛感させられる年であった。歌舞伎・文楽・日本舞踊・邦楽などの主催事業は新国立劇場、国立能楽堂や公共ホールに場を移して催されたが公演数は減り、集客の苦戦も見られる。2回の入札は不成立に終わり、2025年年初までには着工予定の目途も立っておらず先行きは不透明だ。1966年の同劇場開場以来の優れた特色である歌舞伎演目の通し上演も「夏祭浪花鑑」(9月)のみであった。「国立」と名の付く施設がこれだけいいのかと思う。

歌舞伎では中堅の活躍が印象的で、また再演を含め新作が多く上演された。コロナ禍以降、確実に世代交代が進んでいる。

歌舞伎座は1月が「壽 初春大歌舞伎」。講談を素材に2022年10月に初演された忠臣蔵の外伝物「荒川十太夫」を早くも再演。構想し、実現に向けてリードしてきた松緑の十太夫、坂東亀蔵の松平定直ら主な配役はそのままに堀部安兵衛が猿之助から中車に代わった。「江戸みやげ 狐狸狐狸ばなし」は幸四郎の伊之助、尾上右近のおきわ。「息子」では白鸚、幸四郎、染五郎の高麗屋三代が共演。以上3作はすべて新作及び新歌舞伎である。最後の「娘道成寺」は花子を14日まで壱太郎、15日から尾上右近で、ともにしっかりと所作で巧者ぶりを示した。

2月は「猿若祭二月大歌舞伎」で「十八世勘三郎十三回忌追善興行」と副題が付いた。「野崎村」は十八世に師事した鶴松のお光。田舎娘らしい素朴さとお染への気後れと反発を愛らしく見せ、哀れさを際立たせた。七之助の久松、児太郎のお染が役らしい味わい。「籠釣瓶」では共に初役の勘九郎の次郎左衛門と七之助の八ツ橋が悲劇に至る過程を鮮明に描き出した。仁左衛門の栄之丞が色男らしいわがままさ。

3月は「三月大歌舞伎」。「寺子屋」は菊之助初役の松玉丸がわが子、小太郎への一貫した思い

を感じさせた。愛之助の源藏、梅枝の千代、新悟の戸浪と周囲もそろった。「御浜御殿綱豊卿」は仁左衛門の綱豊、幸四郎の助右衛門で問答が聞かせた。「伊勢音頭」は「相の山」から「奥庭」まで。幸四郎が「油屋」で怒りを募らせる過程をうまく表現し、雀右衛門のお紺に色気があった。

4月が「四月大歌舞伎」。「夏祭浪花鑑」は愛之助の団七がうだるような夏の上方の香りを濃厚に漂わせ、侠客らしい闊達さ、歌六の三婦が洒脱で橘三郎の義平次が憎々しさを出した。「於染久松色読販」は仁左衛門の鬼門の喜兵衛、玉三郎の土手のお六に焦点をあてた構成で「柳島妙見」「葎屋」「油屋」の三場。約半世紀にわたり共演を続けてきたコンビの息が合う。

5月が「團菊祭五月大歌舞伎」。四世左團次一年祭追善「毛抜」は長男の男女蔵が初役で糸寺弾正を勤めた。「伽羅先代萩」は菊之助の政岡が幼君鶴千代を守る気構えを随所に感じさせ、團十郎の仁木が役にふさわしい不気味さ。「四千両」は梅玉の藤十郎、松緑の富蔵。武士の藤十郎が気弱く、町人の富蔵がしたたかで肝が太いのがミソ。梅玉と松緑が対比をよく示した。久々の上演で「伝馬町西大牢」の囚人たちのやりとりがおもしろい。隠居でいい味わいを出した團蔵はこれが最後の舞台となった。

6月が「六月大歌舞伎」。時蔵が初代萬壽、梅枝が六代目時蔵を襲名し、梅枝の長男の五代目梅枝、獅童の長男、初代陽喜、次男、初代夏幹の初舞台があった。昼の時蔵襲名披露狂言が「三笠山御殿」。時蔵のお三輪は豪壮な御殿に入り込んだ逡巡を感じさせ、官女にいたぶられての独吟に乗っての所作に切なさを示すなど、感情の起伏を丁寧表現。いじめの官女は歌六、又五郎、錦之助、獅童、歌昇、萬太郎、種之助、隼人と血縁が顔を揃えた。劇中で襲名口上。

夜の襲名狂言は「山姥」で萬壽の山姥が優美さを表現。劇中で襲名口上。「魚屋宗五郎」では獅童が初役で宗五郎を勤め、酒に負けての変化をしっかりと描き、七之助のおはまが世話を

女房ぶり。

7月は「七月大歌舞伎」。昼が「義経千本桜」を約3時間40分に凝縮した「星合世十三團」。團十郎が権太、忠信、維盛から女方の卿の君、老け役の弥左衛門まで13役を演じ、2度の宙乗りを披露。夜は「裏表太閤記」。「太閤記物」をつなぎ合わせた1981年初演の作品を大幅に改定した。幸四郎の秀吉に知将らしきがあり、松世の光秀が信長に愚弄された屈辱と変化を示した。

8月は「八月納涼歌舞伎」。山本周五郎作品を原作にした「ゆうれい貸屋」は巳之助の弥六と児太郎の芸者の幽霊、染次がそれぞれに父である三津五郎と福助の役を引き継ぎ、ユーモラスさを見せた。「髪結新三」は勘九郎初役の新三に切れ味と色気。幸四郎の弥太五郎源七が落ち目の顔役らしい焦燥感を感じさせた。「狐花」は人気ミステリー作家、京極夏彦の初の歌舞伎脚本で、同時に同名の小説も発表されて話題となった。幸四郎演じる憑き物落としの中禅寺淵齋が作事奉行、上月監物(勘九郎)ゆかりの人々に起る怪異に迫る推理劇。登場人物が個性的で、彼岸花をあしらった装置も印象的だった。

9月は「秀山祭九月大歌舞伎」。「合邦庵室」は菊之助の玉手御前が若さの感じられる華やぎと色気を出し、真実を打ち明けて後に最期を遂げる哀れさを際立たせた。歌六の合邦、愛之助の俊徳丸、吉弥のおとく、米吉の浅香姫と周囲もそろった。

「吉野川」は玉三郎の定高に気品と大家を背負う矜持が感じられ、松緑の大判事は舞台ぶりが大きく息子の久我之助(染五郎)を評価し、惜しむ気持ちは現れた。染五郎は涼しげな姿が役にふさわしく、左近の雛鳥に健気さがうかがえた。「勸進帳」は幸四郎の弁慶が力強さと義経への忠義心を感じさせ、菊之助の富樫との問答に緊迫感が出た。染五郎の義経に気品。

10月は「錦秋十月大歌舞伎」。「俊寛」の俊寛は初役の菊之助。都に残した妻への思いが根底にあることがうかがえた。「権三と助十」は獅童の権三と松緑の助十が軽妙。「婦系図」は「本郷薬師緑日」「柳橋柏家」「湯島境内」。仁左衛門の早瀬主税、玉三郎のお蔭。「源氏物語 六条御息所の巻」は新作。玉三郎の御息所、染五郎の光源氏。

11月はメンテナンスのため、特別公演が催さ

れた。最初が「ようこそ歌舞伎座へ」で、虎之介が解説し、幸四郎が歌舞伎座を案内する映像が上映された。続いて左近、歌昇、坂東亀蔵による「三人吉三 大川端庚申塚」。最後が松緑と若手花形による「石橋」。

12月は「十二月大歌舞伎」。「あらしのよるに」は絵本を原作にした新作で、2015年9月、南座での初演以来、再演を重ねてきた。狼のがぶは初演からの獅童の持ち役で、相手役の山羊のめいに初めて菊之助を迎えた。獅童が本能との葛藤をユーモラスに見せ、菊之助が和事を思わせる優しさで対比が出た。澤村藤十郎の弟子、國矢が藤十郎の芸養子となり、前名の精四郎を二代目として襲名して幹部昇進。劇中で口上があった。

「加賀鷺」は松緑初役の道玄がすごみと愛嬌の二面性を出した。「舞鶴雪月花」は3段構成の舞踊。勘九郎が桜の精、松虫、雪達磨を踊りぬいた。「天守物語」は玉三郎の富姫。前半で七之助の亀姫と妖しくも甘美なやりとりを、後半では團子の図書之助の心映えの美しさに動かされる姿を表現。七之助は愛らしさと明るい色気があり、團子は清潔感と一途さを感じさせた。

国立劇場は1月が新国立劇場での「初春歌舞伎公演」。「石切梶原」は菊之助初役の梶原平三。吉右衛門型でさっそうと演じた。「葛の葉」は梅枝が初役で葛の葉と葛の葉姫を勤めた。葛の葉はしっかりとした女房ぶり、葛の葉姫では姫らしいおっとりとした様子を示した。

6月はサンパール荒川を会場にした「歌舞伎鑑賞教室」で「恋飛脚大和往来一封印切一」。「歌舞伎のみかた」。

7月はティアラこうとう大ホール、調布市グリーンホール大ホールで「歌舞伎鑑賞教室」。「義経千本桜 河連法眼館」「歌舞伎のみかた」。

9月は新国立劇場で「夏祭浪花鑑」。彦三郎初役の団七九郎兵衛はさっそうぶりが際立った。孝太郎のお辰は台詞がよく、ちょっとくだけた風情があり、夫・徳兵衛への情愛が感じられた。坂東亀蔵の徳兵衛、片岡亀蔵の義平次、男女蔵の三婦。

新橋演舞場は1月が「平家女護嶋 恩愛麻絲央源平一 S A N E M O R I P A R T II」。近松門左衛門作品を書き換え、「朱雀御所」で常盤御前の詮議に訪れる武将を宗清から実盛に代え

た。團十郎の後寛、常盤御前、実盛の3役。

2月はスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」。スーパー歌舞伎の第一作として二世猿翁が1986年に生み出した作品で、歌舞伎のレパートリーとして定着した。共に初役の30代の隼人と20代の團子がヤマトタケルをダブルキャストで演じた。隼人は豪快な立ち回りとシャープなたたずまいが印象的で美しく力強い。團子は祖父の二世猿翁をほうふつさせる台詞回しで父への純粋な思いが受け入れられないタケルを繊細に描写し、悲劇性を浮かび上がらせた。二世猿翁の長男、中車が帝を演じ、笑也、笑三郎、猿弥ら二世猿翁に師事した澤瀉屋の俳優はもちろん、中村福之助、歌之助ら若手花形が周囲を固めた。

11月末から12月が歌舞伎NEXT「朧の森に棲む鬼」。シェークスピアの「リチャード三世」を下敷きに、松竹と劇団☆新感線のコラボにより2007年に初演された作品を歌舞伎としてよみがえらせた。幸四郎と松也が王座を狙う主人公のライをダブルキャストで演じた。緻密でありながら大胆な幸四郎、豪快で色気のある松也とそれぞれの特色が出た。舞台進行がスムーズで尾上右近、時蔵、猿弥、染五郎、彌十郎ら周囲も好演で充実した舞台となった。

大阪松竹座は1月3～14日が「坂東玉三郎初春お年玉公演」で「黒髪」と「由縁の月」。

同月18～20日が「坂東玉三郎はるのひととき」で、「越路吹雪物語」玉三郎、小朝▽「芝浜」小朝▽「雪」玉三郎。

同月22～28日が「Night KABUKI」で「歌舞伎のみかた」千壽▽「操り三番叟」千次郎、愛三朗。

2月が「立春歌舞伎特別公演」。昼が「源平布引滝 義賢最期」「同 竹生島遊覧」「同 実盛物語」。夜が「ちよいのせ」「連獅子」「曾根崎心中」。

6月が「ヤマトタケル」。團子のヤマトタケル。

7月が「七月大歌舞伎」。昼が「小さん金五郎」、「藤娘 俄獅子」と萬壽襲名披露狂言の「恋女房染分手綱 重の井」で萬壽の重の井、梅枝の三吉。萬壽が三吉の素性を知りながら、公には母と名乗れない苦悩を描き出した。夜が「義経千本桜」の「木の実」「小金吾討死」「すし屋」で仁左衛門が権太で妻子との別れの悲しみを表現。「汐汲」と時蔵襲名披露狂言「嬭山姥」。時蔵の荻野屋八重桐。

10月が「十月大歌舞伎」で「十三代目市川團十

郎白猿襲名披露」。昼が「雷神不動北山櫻」。夜が「義経千本桜 鳥居前」、「一條大蔵譚」、「口上」、「連獅子」

南座は3月が「三月花形歌舞伎」。昼が「河庄」「将門」、夜が「女殺油地獄」「将門」。

5月が「歌舞伎鑑賞教室」。「京人形」

6月が「坂東玉三郎特別公演」。「阿古屋」。

9月が「九月花形歌舞伎」。「あらしのよるに」獅童のがぶ、壺太郎のめい。

11月が「歌舞伎への誘い～鑑賞と体験～」。「歌舞伎のみかた」「猩々」。

12月が「吉顔顔見世興行」。昼が「蝶々夫人」「三人吉三 大川端」「大津絵道成寺」「ぢいさんばあさん」、夜が「元禄忠臣蔵 仙石屋敷」「かさね」「御所五郎蔵」「越後獅子」。「大津絵道成寺」と「かさね」の与右衛門に出演予定の愛之助が11月29日、舞台稽古中の事故で骨折して休演となり、「大津絵道成寺」は壺太郎、与右衛門は萬太郎に代わった。

御園座は2月が「二月御園座大歌舞伎」。「十三代目市川團十郎白猿襲名披露」。昼が「三人吉三 大川端」「鯉つかみ」「外郎売」「吉野山」。夜が「相生獅子」「丸橋忠弥」「口上」「勸進帳」。

5月が「ヤマトタケル」で團子のヤマトタケル。

6月は「坂東玉三郎特別公演」で「怪談牡丹燈籠」。

10月は「御園座錦秋花形歌舞伎」。「正札附根元草摺」「太刀盗人」。

博多座は2月が「二月花形歌舞伎」。「江戸宵闇妖鉤爪」「鶴の殿様」。「江戸宵闇妖鉤爪」は江戸川乱歩作「人間豹」の歌舞伎化で2008年に国立劇場で初演された作品の2011年の大阪松竹座以来の再演。初演で白鷺が演じた明智小五郎が幸四郎に、幸四郎が演じた恩田乱学が染五郎に代わった。

6月は「六月博多座大歌舞伎」。昼が「修禅寺物語」「身替座禅」「新口村」。夜が「東海道四谷怪談」。「四谷怪談」は尾上右近が初役でお岩、小仏小平、佐藤と茂七の三役を勤めた。

10月は「ヤマトタケル」。ヤマトタケルは隼人と團子のダブルキャスト。

それ以外の大劇場では1月が「新春浅草歌舞伎」(浅草公会堂)。第1部は「十種香」「源氏店」「どんつく」。第2部が「熊谷陣屋」「流星」「魚屋宗五郎」

3月が「名古屋平成中村座同朋高校公演」。昼が「弁天娘女男白浪」「身替座禪」。夜が「義経千本桜 川連法眼館」「二人藤娘」。

4月が旧金毘羅大芝居(金丸座)の「四国こんぴら歌舞伎大芝居」。第1部が「沼津」「羽衣」、第2部が「松竹梅湯島掛額」「教草吉原雀」。

5月がシアターミラノ座の「歌舞伎町大歌舞伎」。新宿・歌舞伎町の東急歌舞伎町タワーでの初の歌舞伎公演。昼夜同一演目で最初が「正札附根元草摺」「流星」の舞踊二題。続いて落語の「貧乏神」をもとにした小佐田定雄脚本の「福叶神恋斬」(今井豊茂演出)。七之助の貧乏神おびんがユーモラスで、長唄三味線の「娘道成寺」の音にひかれ、所作を見せるなど芸達者ぶりを発揮。虎之介が相手役の大工辰五郎で怠け者だが人は悪くないところを表現。仲間の貧乏神の勘九郎がいい味わい。

11月は明治座で「十一月花形歌舞伎」。勘九郎、七之助らが中心の一座。「一本刀土俵入」は勘九郎が打ちしおれた取的からシャープな渡世人への変化を鮮やかに示し、お蔭への純粋な思いも一貫させた。七之助のお蔭は序幕で捨て鉢さきと情味ある気風の良さを示し、大詰では子と夫への愛を表現した。

「鎌倉三代記 絹川村閑居」では勘九郎の高綱が藤三郎ではおかしみを、本性を現してからは軍師らしい聡明さ、強さを感じさせた。米吉の時姫に強さと華やぎ、巳之助の三浦のみに悲愴美。「お染の七役」は七之助の七役。どの役も良かったが、ことに竹川に御殿女中らしい品格があり、土手のお六に悪婆らしい退廃美の色気が出た。喜多村緑郎の鬼門の喜兵衛にすごみ。

同月、「永楽館大歌舞伎」(兵庫県豊岡市・永楽館)。

愛之助が主軸の「袖袷祭」「口上」「高坪」。

同月、「立川立飛歌舞伎」(東京都立川市・立川ステージガーデン)。愛之助、中車、壱太郎らの出演。黙阿弥の「御所五郎蔵」を書き換えた「新版 御所五郎蔵」と壱太郎が九変化を見せる舞踊「玉藻前立飛錦栄」の上演。

巡業は6、7月は獅童が中心の「松竹特別歌舞伎」。「鞍當」「供奴」「橋弁慶」。

8、9月は「十三代目市川團十郎白猿襲名披露巡業」。「祝成田櫓賑」「口上」「河内山」。

10、11月は「松竹大歌舞伎」。錦之助、隼人親

子を中心。「引窓」「身替座禪」。

10月・勘九郎、七之助の「錦秋歌舞伎特別公演 2024」。「十八世勘三郎十三回忌追善」。「若鶴彩競廓景色」「舞鶴五條橋」の舞踊二題。

自主公演も多行われた。

8月・中村鷹之資主催の「第九回翔之會」(国立能楽堂)。狂言方と泉流の野村裕基、左近、錦之助らが出演。番組は「二人三番叟」「扇の的」「棒しばり」。

同月・「第九回あべの歌舞伎晴の会」(大阪・近鉄アート館)。上方歌舞伎塾出身者が中心。「伊賀越道中双六」を千次郎が改訂し、仁左衛門が監修・指導。

同月・国立文楽劇場、9月・浅草公会堂で尾上右近主催の「第八回研の會」。「摂州合邦辻合邦庵座」「連獅子」。

同月・「緑糸乃会」(墨田区・曳舟文化センター)。梅玉門下の梅乃と竹本三味線方の鶴澤繁二主催の会。「竹本の魅力」「引窓」「団子売」。

9月・浅草公会堂で橋之助、中村福之助、歌之助の三兄弟が主催する「神谷町小歌舞伎」。「角力場」「一本刀土俵入」。

勉強会は8月に「第30回 稚魚の会・歌舞伎会合同公演」。「傾城反魂香 土佐将監閑居」「太刀盗人」「乗合船」。

10月に「伝統歌舞伎保存会研修発表会」(歌舞伎座)で「菅原伝授手習鑑 加茂堤」。

前進座は1月が「京都初春特別公演」(京都劇場)。「魚屋宗五郎」「七福神宝之入船」。

5月が「前進座歌舞伎公演」。序幕の「雪祭五人三番叟」は女優五人の三番叟、語りが女流義太夫、囃子方も全員が女性。中幕が「口上」。最後の「鳴神」は芳三郎初役の鳴神上人と國太郎の絶間姫。二世左團次の教えを受けた二世長十郎から引き継がれた型での上演。芳三郎は声を通り台詞が明瞭で荒事にふさわしい。國太郎は柔らかさの中に芯の強さを感じさせた。

前進座は6月が巡業公演で「人情噺文七元結」と「楽しい歌舞伎」。

1月15日に三津五郎一門の女方、坂東玉之助が94歳、11月19日に尾上菊五郎劇団に所属し、大きな舞台ぶりで敵役や武将役で活躍した尾上菊五郎劇団の九代目市川團蔵が73歳で没した。

こだま・しょうこ

演劇ジャーナリスト。東京生まれ。毎日新聞社学芸部専門編集委員として演劇の取材、評を担当し、2023年独立。著書に「芝翫芸模様」(集英社)、「二代目 聞き書き中村吉右衛門」(朝日文庫)、「完本 中村吉右衛門」(朝日新聞出版)、「艶やかに 尾上菊五郎聞き書き」(毎日新聞出版)など。

## [商業演劇]

## 2024年の商業演劇

水落 潔

元旦に能登半島でマグニチュード7.6の大地震が発生し土砂崩れ、家屋の倒壊、土地の液状化など大きな被害が出た。インフラ施設や交通網が各地で寸断したため復旧作業が進まなかった。そのうえ9月末に豪雨に見舞われ仮設住宅が浸水するなど二重の被災に襲われた。関連死を含め犠牲者は約500人に及んだ。昨年発覚した自民党派閥の裏金疑惑は政治不信を生み、岸田首相は責任を取って自民党総裁選に出馬せず、党内野党だった石破茂氏が新総裁に選ばれた。11月に石破内閣が発足したが、直後行われた総選挙で自公は過半数を割り宙吊り国会になった。SNSで若者を勧誘する「闇バイト」強盗が首都圏で続発し、またSNSを駆使した選挙運動が大きな影響力を持つことが明らかになった。強大な力を持ち始めたSNSやAIにどう向かい合うかが世界的な課題になってきた。アメリカ大統領にトランプ氏が再び咲き、ウクライナやガザ地区での戦争は依然続いている。すべてに先行きの読めないまま一年が暮れた。明るい話題は大谷祥平選手が大リーグ史上初の50-50(盗塁、本塁打)を達成しMVPに選ばれたこと、ノーベル平和賞に日本被団協が選ばれたことである。

商業演劇の世界では昨年夏に3年に亘るコロナ騒動が一段落し、今年になって観客数も次第に増えてきた。商業演劇の主流になったミュージカル公演は活況を取り戻した。ミュージカル以外では笑いや派手なアクションを売り物にする舞台が増えてきた。反面、俳優の演技力やしみじみとした物語を楽しむ大人の舞台は見られなくなった。世相と同様粗っぽい演劇が増えた気がする。

新橋演舞場は1月が「團十郎一座の歌舞伎」、2月から3月中旬にかけてはスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」を上演した。4月は和洋のステージで構成したショー「祭GALA」。5月は横内謙介・演出の「トンカツロック」。東京の下町の商店街を舞台にした青春群像劇で、元暴走族で

トンカツ屋の主人、そこで働く元プロボクサー、店の常連の中学教師がそれぞれの夢を実現するため苦闘する姿を綴った作品。その三人を「美少年」の那須雄登、金指一世、岩崎大昇が演じ横内が主宰する扉座の俳優が共演した。6月はシリーズ第10弾の「熱海五郎一座」で、吉高寿男作、三宅裕司構成・演出「スマイルフォーエバー」。記念公演とあって一座の名にちなむ伊東四朗が松下由樹と共にゲスト出演した。白昼の東京で銀行強盗事件が発生し、犯人は居合わせた都知事(松下)に向かって発砲したが、なぜか弾は不可思議な軌道で老人(伊東)の足に命中した。実は老人は魔法使いだった。捜査を担当したのがラサール石井と東貴博(深沢邦之とダブル)の凸凹刑事、一方老人の通う魔法学校には様々な望みを持つ生徒(小倉久寛、春風亭昇太、渡辺正行)がいた。彼らが協力して犯人探しに乗り出すというコメディだった。7月は「七夕喜劇まつり」と題した喜劇公演。藤山直美を中心に歌舞伎から市村萬次郎、中村亀鶴、澤村宗之助、新派から春本由香、喜劇畑から大津嶺子、いま寛大が参加して「唐木の看板」「はなのお六」を上演した。共に松竹新喜劇の財産演目で「唐木」はすれ違いの可笑しさを「追っ駆け」という手法で見せる古風な笑劇、「はなのお六」は「はなの六兵衛」を女に直したしゃべりの喜劇だが、歌舞伎仕立てにしたことで新喜劇版とは一味違った舞台に仕上がった。8月はOSK日本歌劇団のレビュー「夏のおどり」でトップスター楊琳のサヨナラ公演。9月は木下恵介監督が1951年に日本初の長編カラー映画として作った「カルメン故郷に帰る」を羽原大介脚本、錦織一清演出で舞台化した。戦後の価値観が混乱した時代に、素朴な村で巻起こったストリップ騒動を風刺的に描く一方、戦争で傷ついた人々の痛みや親子や夫婦の情愛を綴った人情喜劇。映画で高峰秀子が演じたストリッパーのカルメンを藤原紀香が演じ、横山由依、渋谷天外、石倉三郎、徳重聡らが共演した。9月は6人組のグルー

ブ「7 MEN 侍」のショー「MASSARA」。10月は横内謙介作・演出の「劇走江戸鴉〜チャリンコ傾奇組〜」で元禄時代を舞台に自分流の正義を貫き時代を疾走した若者たちのドラマ。歌舞伎で有名な雁金五人男を借り、雁金弾七をはじめとする五人男が江戸を支配する悪奉行と彼と手を組むヤクザ一味と対決する物語。井上瑞稀、橋本涼、浜中文一、武田玲奈、山本亨、オレノグラフィティらが出演した。11月は森見登美彦の人気小説をG2が脚本・演出した「有頂天家族」。古都京都では大昔から大勢の狸が人間に化けて暮らしている。誇り高い狸の一家を巡り狸と人間と天狗が繰り広げる大騒ぎを描いたドラマで、主役の矢三郎を歌舞伎の中村鷹之資と濱田龍臣がダブルキャストで演じ、若月佑美、渡部秀、池田成志、相島一之、檀れいが共演した。12月はかつて幸四郎が「劇団☆新感線」に客演した中島かずき作、いのうえひでのり演出「朧の森に棲む鬼」を歌舞伎俳優たちで上演する歌舞伎NEXT。

松竹はほかに新派公演として三越劇場で2月に山田洋次脚本・演出「東京物語」、6月に久保田万太郎作「蜚」、川口松太郎作「お江戸みやげ」を、9月には日生劇場で松竹ミュージカル「三銃士」を上演した。

帝劇は3月以外は年間ミュージカル路線を貫いた。ミュージカルのラインナップは1月が「Act ONE」、2月が「ジョジョの奇妙な冒険ファンタムブラッド」、3月だけが宮崎駿作のアニメ映画をジョン・ケアードが翻案演出した「千と千尋の神隠し」の再演で、能舞台をイメージした舞台で、人力で動かすパペットと俳優が共演する幻想的で妖しい世界を表現した。主役の千尋には初演の白石明音、橋本環奈のほか川栄李奈、福地桃子が新たに加わった。この公演の後、5月7日から8月24日までロンドン・コロシウムで上演し30万人の観客を動員した。4、5月は「Endless SHOCK」、6月は「ムーラン・ルージュ!」の再演、8、9月が「モーツァルト!」、10月が「DREAM BOYS」、11月は「Endless SHOCK」、12月から25年2月まで「レ・ミゼラブル」をロングランした後に改築のため閉館した。

シアタークリエは3月以外はすべてミュージカル公演だった。1月が山口祐一郎、2月前半が海宝直人のコンサート。2月後半から3月は

「KERA CROSS 5」と題してケラリーノ・サンドロヴィッチ作、演出「骨と軽蔑」を上演した。これまではケラの旧作を別の演出家で上演してきたが、今回はシリーズの締めくくりとしてケラ自身が新作を書き演出した。東西に分かれて内戦が行われている田舎町で兵器工場を営んでいる一家の屋敷で展開する女優7人による会話劇。一家の主は病気で二階で臥せっている。宮沢りえの長女は作家、鈴木杏の次女の夫は行方不明、姉妹の母親の峯村リエはアルコール依存症、そんな一家と父の秘書の水川あさみ、作家のファンの小池栄子、さらに犬山イヌコ、堀内敬子らがからみ物語が展開する。悲惨な世間とは無縁に豊かな日常を暮らす人々を描きながら、背後に現代を覆う不安と恐怖を感じさせる作品だった。3月後半から4月半ばまでは「町田くんの世界」、4月後半から5月前半は「CROSS ROAD〜悪魔のヴァイオリニスト パガニーニ」。5月後半から6月前半は「ナビレラ=それでも蝶は舞う=」。6月半ばから7月始めは「GIRLFRIEND」。7月は「モダン・ミリー」。8月は「ライムライト」。9月は「プレミアム音楽朗読劇 VOICARION」。10月は「tick.tick...BOOM!」、11月は「SONG WRITERS」、12月は「next to normal」でいずれもミュージカル。

東宝はほかに1月に日生劇場で「トッツイー」、4月に「王様と私」、5月に「この世界の片隅に」、9月に有楽町よりホールで「CLUB7」、10月に日生劇場で「ニュージーズ」、11月に国際フォーラムで「グラウンドホッグ・デー」、東京ドームシアターオーブで「プロデューサーズ」、東京ドームシティホールでABC座2024「大金星」を上演した。いずれもミュージカルである。12月に日生劇場で井上ひさし作、藤田俊太郎演出「天保十二年のシェイクスピア」を上演した。20年に日生劇場で初演したがコロナ禍で千秋楽直前に上演中止になった舞台で、今回は一部キャストを変えての再演。作者が祝祭音楽劇と名付けているが、シェイクスピアの全作品を「天保水滸伝」の世界に移し替え再構築した凝った趣向の娯楽大作。「マクベス」「リチャード三世」「オセロー」のイアゴーの三人を煮詰めたような孤児上がりの佐渡三三次が、ヤクザの世界で申し上がるものの最後には破滅する姿を、色と欲にまみれた多彩な人々との絡みを通して描いた物



語。初演で高橋一生が演じた三世次を浦井健治が演じ、木場勝己、中村梅雀、瀬奈じゅん、唯月ふうか、梅沢昌代らが共演した。

明治座は1月が日本テレビ開局七十年記念舞台「西遊記」。マキノノゾミ脚本、堤幸彦演出で、片岡愛之助の孫悟空、小池徹平の三蔵法師以下加藤和樹、戸次重幸、村井良大、松平健、中山美穂らが出演し、映像を駆使したアクションドラマを繰り広げた。2月から3月ははじめにかけては明治座創業150年ファイナル公演と題して北条司原作、岩崎う大脚本、河原雅彦演出、共同脚本「メイジ・ザ・キャッツアイ」を上演した。明治時代、キャッツアイと呼ばれた美女の盗賊の三姉妹(藤原紀香、高島礼子、剛力彩芽)の活躍を描いたサスペンスコメディで、染谷俊之、上山竜治・長谷川初範、美弥りからが共演した。3月は「福田こうへい公演」で「雪の渡り鳥」と「コンサート」。4月は末原拓馬脚本、演出の「三國志演技〜孫呉」で漢の王爾を巡る争いを描いたアクションドラマ。荒牧慶彦と梅津瑞樹がダブル主演した。5月は「地球ゴージャス三十周年記念公演」で岸谷五朗作、演出「儂き光のラブソディ」。岸谷のほか寺脇康文、中川大志、風間俊介、坂根知寿らが出演した。6月は「中村雅俊芸能生活50周年記念公演」。堤泰之脚本、玉野和紀の上演台本・演出振付の「どこへ時が流れても」は東日本大震災で奇跡的に残ったジュークボックスから流れ出たメロディで綴る昭和音楽劇、久本雅美らが共演した。二部は歌謡ショー。7月は「松平健芸能生活50周年記念」の「暴れん坊將軍」。細川徹脚本、演出で黒須藩を巡る悪の陰謀を暴くお馴染みのドラマで、辰巳ゆうと、笠原草らが共演した。二部はショー。8月は「水谷千恵子コンサート」の後、「劇団☆新感線」が初出演し、中島かずき作、いのうえひでのり演出「バサラオ」を上演した。幕府と帝が争う戦乱の世を舞台に麗しい姿で人の心を捉え天下を握ろうとするヒュウガと元密偵で幕府に追われるカイリという二人の男を軸に展開するピカレスクロマン。生田斗真と中村倫也が客演し、古田新太、栗根まこと以下劇団のメンバーとりょう、西野七瀬らが共演した。10月は「梅沢富美男・研ナオコ公演」。11月は中村勘九郎、七之助を中心にした「花形歌舞伎」。12月は灰原葉原作、桑原裕子脚本、青木

豪演出の「応天の門」。平安時代、権力争いに明け暮れる公家の世界で起こる怪事件を、都を守護する在原業平と文章生の菅原道真が協力して解決していく物語。高橋克典、佐藤流司が主演、西岡徳馬、篠井英介、花總まりらが共演した。年末には近藤真彦主演「ギンギラ学園物語」を上演、小堺一機、川崎麻世、中村繁之らがゲスト出演した。

前進座は1月に京都劇場で「魚屋宗五郎」七福神、5月に東京ブリリアホールで「雪祭五人三番伎」口上「鳴神」、9月に親鸞聖人生誕850年記念公演として大阪文楽劇場で渡辺善則作、河原崎國太郎・川名あき演出「花ごぶし」、11月に三越劇場で海音寺潮五郎原作、朱海青脚本、鈴木龍男演出「雪間草一利休の娘お吟」を上演した。「雪間草」は堅い絆で結ばれていた秀吉と利休が何故離反し、利休が切腹する羽目になったのかをお吟の存在を軸にして描いた新作時代劇で、お吟を浜名実貴、秀吉を嵐芳三郎、利休の弟子でお吟を慕う宗三を河原崎國太郎が演じ、利休には林与一が客演した。このほか「文七元結」「楽しい歌舞伎」「さんしょう太夫」「花ごぶし」「ひとごろし」「くずーい屑屋でござい」「松本清張朗読劇」などを全国で上演した。

東京ではほかに名作ミステリーを舞台化しているノサカラボが1月に大手町三井ホールで東野圭吾原作「ある閉ざされた雪の山荘で」3月にサンシャイン劇場で高木彬光原作「わが一高時代の犯罪」、4月に三越劇場でアガサ・クリスティ原作「ゼロ時間へ」を上演した。いずれも野坂実演出。ホリプロが2月に東京ブリリアホールで源孝志脚本、蓬萊竜太演出「中村仲蔵」を上演した。下積み役者から歌舞伎界の頂点に上りつめた初代仲蔵の破天荒な人生を綴った舞台で、藤原竜也が主演し高嶋政宏、市原隼人、尾上紫らが共演した。5月には東京芸術劇場で宮崎駿のアニメ「未来少年コナン」を伊藤靖朗脚本、ダビッド・マンブッフ演出で舞台化した。加藤清史郎が主演、影山優佳、成河、門脇麦らが共演した。TBSが4月に日本青年館でアンドリュー・カウフマン原作、G2脚本、演出「銀行強盗にあつて妻が縮んでしまった事件」を上演、谷原章介、花總まりが出演した。梅田芸術劇場が2月に日生劇場で池田亮作、デヴィッド・ルヴォー演出「テラヤマキャバレー」を上演

した。寺山修司の作品をコラージュした音楽劇で、香取慎吾が主演し成河、伊礼彼方、村川絵梨らが共演した。ニッポン放送が4月にサンシャイン劇場で万城目学原作、上田誠脚本、演出「鴨川ホルモー、ワンスモア」を上演した。フジテレビが7月に三越劇場で冨坂友脚本、演出「逃奔政走」を上演した。人気知事がスキャンダルの火消しに奔走するコメディで、鈴木保奈美が主演し寺西拓人、佐藤B作、相島一之らが共演した。5月の博品館劇場で三谷幸喜構成、演出の一人芝居「虹のかげら」を戸田恵子が演じた。ジュディ・ガーランドを素材にした音楽劇で、この後ニューヨークで上演し7月に有楽町よみうりホールで凱旋公演を行った。横浜夢座を主宰する五大路子が25周年記念公演として9月にKAATで「高貴楼お倉」を上演した。一昨年開幕した赤坂ACTシアターの「舞台 ハリーポッターと呪いの子」はロングランを続けた。

御園座は今年も東京や大阪の舞台の引っ越し公演が多かった。1月が「西遊記」、「ベートーヴェン」。2月は「團十郎襲名公演」、「トツツイー」、3月は「中村仲蔵」の後「里見浩太朗公演」で「水戸黄門」と「春に唄う」。市川由紀乃、水森かおりが共演した。4月は「千と千尋の神隠し」「銀行強盗にあって妻が縮んでしまった事件」、5月は「ヤマトタケル」、6月は「この世界の片隅に」「ベルばら50周年記念公演」、7月は「梅沢富美男・研ナオコ公演」「宝塚歌劇花組公演」、8月は「ピーターパン」「吉本新喜劇」「カルメン故郷に帰る」など。9月は「舟木一夫公演」「鶴瓶落語会」「マツケンサンバ・コンサート」など。10月は「花形歌舞伎」ほか、11月は「里見浩太朗公演」「水川きよし」「吉本新喜劇」「有頂天家族」、12月は「グラウンドホッグ・デー」、「ギンギラ学園物語」などを上演した。

松竹座は1月が玉三郎公演で、前半が「初春公演」中盤から「玉三郎はるのひととき」と題して春風亭小朝とのコラボで「越路吹雪物語」ほかを上演、後半は「玉三郎コンサート」。2月は「立春歌舞伎特別公演」、3月は旧関ジャニによる「おいでよ！ミナミ笑天街」と題したショー、4月前半はOSK「春のおどり」、後半は新橋演舞場から引っ越した「トンカツロック」、5月は喜劇発祥120年と題して松竹新喜劇が「幸福餅」と「村は祭りで大騒ぎ」を上演、川中美幸がゲスト出演

した。6月は「ヤマトタケル」、7月は「大歌舞伎」、8月は関西ジュニアの「サマバケ2024」、9月は演舞場から引っ越した「カルメン故郷に帰る」と「松竹座体験ツアー」、10月は「團十郎襲名公演」、11月は前半が「劇走江戸鴉」、後半は松竹新喜劇で「砂糖壺」「人生双六」を上演した。11月末から12月前半は渡辺雄介作、福田軋球演出「夢見る白虎隊」その後「WEST 10th」を上演した。

新歌舞伎座は今年も歌手のコンサートが中心だったが、東京で上演した話題作を上演するケースも増えている。1月は「純烈」ほか。2月は「福田こうへい」「三波春夫メモリアルコンサート」ほか。3月は堀越真作、水谷幹夫の「花盛り四人姉妹」で5年振り3演目。藤あや子、姿月あさと、浅香唯、三倉茉莉が共演した。後半はミュージカル「魔女の宅急便」。4月はG2脚本、加納幸和演出「新生！熱血ブラバン少女」。17年に博多座で初演した博多華丸主演の舞台のニューバージョンで紅ゆずる、浅野ゆう子が共演した。5月は「舟木一夫、神野美伽ジョイントコンサート」、東宝製作の「CROSS ROAD」など。6月は藤山直美、前川清主演の「だいこん役者」。藤本有紀原作、横山一真脚本、竹園元演出で、自身を失った夫を励ます妻の奮闘を綴った旅役者夫婦の人情劇。7月は「コロケ」8月は「水谷千重子」「沖縄音楽祭」など。9月は「三山ひろし」など歌手の短期公演が並んだ。10月は明治座から引っ越した「松平健50周年記念公演」の「暴れん坊將軍」。11月は「五木ひろし」で坂本冬美が特別出演し「喧嘩安兵衛」と歌謡ショー、その後ミュージカル「グラウンドホッグ・デー」を上演した。12月は「こまつ座」の「太鼓たたいて笛吹いて」「水川きよし」など。

JR大阪駅に直結したJPタワー大阪に客席1300のSkyシアターMBSが誕生した。3月27日に開場し、その後「中村仲蔵」「カム フロム アウェイ」「リア王」「望海風斗コンサート」「儂き光のラプソディ」、「この世界の片隅に」、こまつ座「母と暮せば」などを相次いで上演した。このラインアップで分かる通り東京で上演した様々なジャンルの舞台を上演する劇場になりそうだ。

南座は1月前半が松竹新喜劇で「小判掘り出し譚」、「蕾」を上演、久本雅美が客演した。後半は「マクロスF」と△合わせ京都南座歌舞伎の宴

と題した企画展、3月は「花形歌舞伎」。4月は「舟木一夫シアターコンサート」「京都南座衣裳展」「歌舞伎鑑賞教室」、6月は「坂東玉三郎特別公演」、7月はOSKの「レビュー in Kyoto」、8月は真山仁脚本、坂東玉三郎演出、補綴の「星列車で行こう」の再演、9月は「花形歌舞伎」で「あらしのよるに」を上演、10月は「錦秋喜劇特別公演」で藤山直美、三林京子、田村亮らで北條秀司作、大場正昭演出「太夫さん」を上演した。11月は「歌舞伎への誘い」、新橋演舞場から引っ越した「有頂天家族」。12月は恒例の「顔見世」だった。

博多座は1月が「チャーリーとチョコレート工場」「LUPIN」、2月が幸四郎、染五郎らの「花形歌舞伎」、3月が「トッツィー」「KERA CROSS、骨と軽蔑」、4月前半が博多座25周年記念「熱血ブラバン少女」、後半から5月が「千と千尋の神隠し」、その後「CROSS ROADパガニーニ」、6月が「花形歌舞伎」、7、8月が「劇団☆新感線」、8月後半は「モダン・ミリー」、9月は「NEW SIES」、10月は「ヤマトタケル」と「氷川きよし」、11月は「モーツァルト」、12月は例年通りに市民に貸し出した。

#### みずおち・きよし

1936年大阪府生まれ。古典演劇評論家。桜美林大学名誉教授。早稲田大学文学部演劇科卒業。毎日新聞社学芸部を経て編集委員。1991年『上方歌舞伎』で芸術選奨新人賞受賞。

[現代演劇]

## 2024年の現代演劇 — 築地小劇場100周年が現代演劇の転換点に 林 尚之

歌舞伎や新派などの既存の演劇とは一線を画した新しい演劇表現を目指した「新劇」の拠点として、1924年(大正13年)に「築地小劇場」が誕生してから、2024年で100周年を迎えた。さらに築地小劇場で育った若き演劇人が創立した俳優座が創立80周年、さらに俳優座の養成所出身者による青年座、東京演劇アンサンブルが70周年と節目の年となった。一方で、俳優座の専用劇場としてスタートし、70周年を迎えた俳優座劇場が25年4月で閉館するなど、新劇＝現代演劇を取り巻く環境は大きく変化している。その中で、1960年代、70年代に新劇に対抗して現出したアングラ演劇の旗手だった唐十郎さんが亡くなった。旺盛な執筆力で長い間、話題作、問題作を世に送り出してきた唐さんの死は、演劇が最も熱かった時代の終焉を感じさせる。

唐さんのデビューから20年ほど遅れた時期に活動を始めた野田秀樹は、70歳前に新作を上演し、国内公演に続いてロンドン公演も果たした。NODA・MAP公演「正三角関係」。ドストエフスキーの名作「カラマーゾフの兄弟」をモチーフに、長崎の花火師一家(松本潤、長澤まさみ、永山瑛太)が繰り広げる法廷劇で、終盤には原爆投下のシーンを盛り込んだ。観客の「欧米人のクリエイターには創れない。頬つたを引っ張られた気分」という感想に、野田は「届いたな」と手ごたえを感じていた。

劇団た組の加藤拓也も英国デビューした。梅田芸術劇場が英国のチャリングクロス劇場と共同で演劇作品を上演する日英プロジェクトとして、9月に新作「One Small Step」をチャリングクロス劇場で上演した。大手ゼネコンで人類の月への移住計画というプロジェクトで働く夫婦を主人公にした作品。また、谷崎潤一郎の短編小説「刺青」をもとに兼島拓也が脚本、河井朗が演出した「刺青/TATTOER」もチャリングクロス劇場で上演された。美女の肌に彫り込むことを願う若手刺青師を主人公に、日英の俳優が共演した。神奈川芸術劇場は、スコットランドの

劇団ヴァニシング・ポイントとの日英国際共同制作で村上春樹原作の「品川猿の告白」を上演した。ヴァニシング・ポイントのマシュー・レントンの原案・構成・演出で、那須凜、サンディ・グライアソンなど日英の俳優が共演。ワークショップを経て、猿を主人公に幻想的な物語を繰り広げた。日本公演後、25年2月に英国公演が行われた。

ケラリーノ・サンドロヴィッチが東宝に書き下ろした「骨と軽蔑」は東西に分かれて内戦と分断が続く国を舞台に、孤独を抱えた女性たち(宮沢りえ、鈴木杏、水川あさみ、小池栄子ら)の群像劇。主宰する劇団ナイロン100℃の結成30周年記念公演「江戸時代の思い出」は劇団初の時代劇で、時間も空間をも超えて物語が展開した。

イキウメの前川知大は、2009年に初演した小泉八雲の作品をもとにした「奇ッ怪 小泉八雲から聞いた話」をリメイクして再演。古びた旅館を舞台に、ある事件を追ってきた男たちとそこで出会う人々によって語られる物語で、メンバーの成長を感じる舞台でもあった。同舞台はハヤカワ「悲劇喜劇」賞を受賞した。

劇団チョコレートケーキの古川健は、昭和を代表する歌人斎藤茂吉を主人公にした連作「白き山」「つきかげ」を劇団公演として上演した。演出はともに日澤雄介。「白き山」は戦争を賛美する歌を多く作った茂吉が戦後も疎開先にこもり、歌人としての生きる道を模索する姿を描き、「つきかげ」は老いてもなお短歌を作り続ける茂吉とその家族の物語。茂吉を演じた緒方晋は紀伊國屋演劇賞の個人賞、古川は鶴屋南北戯曲賞をそれぞれ受賞した。また、古川は青年劇場に「失敗の研究～ノモンハン1939」を書き下ろした。女性編集者が日本とソ連が軍事衝突したノモンハン事件の関係者取材の中で、なぜその後の戦争を止められなかったかの疑問を抱く過程を丁寧に描いた。

トラッシュマスターズの中津留章仁が作・演出した「掟」は、市長の答弁中に議員席からい

びきが聞こえたことに端を発し、市長がその様子をSNSに投稿したことで市長と議会側の対立する姿を描いた。都知事選で脚光を浴びた石丸伸二氏をモデルにした作品で、中津留の監督で映画化もされた。再演された「ガラクタ」は、多額の補助金目当てに放射性廃棄物の最終処理場建設候補地に立候補した町を舞台に、賛成派と反対派に地域社会が分断される様子を描いた。

iaikuの横山拓也は、瀬戸山美咲の演出で「う蝕」を上演した。被災した島で遺体の身元確認のため集まった歯科医師たちをめぐる不条理劇。作・演出した「流れんな」は約10年ぶり再演で、港町の食堂を舞台に人々の様々な問題が浮き彫りになる対話劇。パルコ劇場に初めて書き下ろした「ワタシたちはモノガタリ」は中学時代から文通を続けた男女(江口のりこ、松尾諭)のファンタジックなラブ・コメディで、演出は小山ゆうな。横山はこの2作品で紀伊國屋演劇賞の個人賞を受賞した。

モダンスイマーズの蓬莱竜太は、ハラスメントをめぐる生きにくさを描いた「雨とベンツと国道と私」を上演した。

鄭義信が、唐さんの長男大鶴佐助が座長の劇団ヒトハダで作・演出した「旅芸人の記録」は、太平洋戦争中の地方都市にある劇場で女剣劇を上演する家族の物語。

JACROWの中村ノブアキが実際に起こった地面詐欺事件をモチーフに作・演出した「地の面」は、騙された企業側の視点からその内幕を描いたビジネス劇。

土田英生が作・演出したMONO公演「御菓子司 亀屋権太楼」は元禄十六年創業をうたう和菓子店の経歴詐称の疑惑をめぐる兄弟の対立を描いた。

serial numberの詩森ろばが作・演出した「神話、夜の果ての」は、カルト宗教二世として育った子供たちの姿を通して、信仰の一線を越えて暴力に転じる過程を描いた。初演で芸術選奨文部科学大臣賞新人賞を受賞した「アンネの日」をブラッシュアップして再演。女性開発者(林田麻里ら)が自分たちに役立つ生理用品開発のため奮闘する姿を描いた。

2023年は公共劇場の芸術監督の交代が相次いだ。24年は新国立劇場で18年から演劇部門

の芸術監督を務める小川絵梨子から上村聡史に26年9月から交代することが発表された。東京芸術劇場でも09年から芸術監督を務める野田秀樹が26年3月で退任し、代わってチェルフィッチュの岡田利規(舞台芸術部門)と山田和樹(音楽部門)が新芸術監督に就任することが発表された。

新国立劇場は意欲的な舞台が続いた。ポーランドの世界的な映画監督クシシュトフ・ケシロフスキの10篇の連作ドラマを舞台化した「デカログ」を須貝英の上演台本、小川絵梨子、上村聡史の演出で上演した。とある団地を舞台に、様々な家庭と生活が交錯する10篇の物語を3つのブロックに分け、4か月かけて連続上演された。1年かけて試演を重ねる「こつこつプロジェクト」の一環として「テーバイ」が上演された。「オイディプス王」「コロノスのオイディプス」「アンティゴネ」の3つのギリシア悲劇を船岩祐太が構成・上演台本・演出を手掛けた。マーティン・マクドナー作、小川演出「ピロマン」は独裁国家で取り調べを受ける作家(成河)と刑事の攻防からの結末が衝撃的。ロシアの作家ミハイル・ブルガーコフ作、アンドリュウ・アプトン改訂・脚本、上村聡史演出「白衛軍」はロシア革命後のウクライナを舞台に赤軍との内戦を戦う白衛軍の一家が時代の波に翻弄される姿を描いた。

東京芸術劇場では、マシュー・ロペス作、熊林弘高演出の「インヘリタンス」は、2010年代のニューヨークを舞台に、エイズとの闘いやゲイ社会の人々の愛情、人生を描き、前後編の上演時間が約7時間の大作だった。河竹黙阿弥作、木ノ下裕一監修・補綴、杉原邦生演出の木ノ下歌舞伎「三人吉三廓初買」は、ほとんど上演されない「地獄の場」を復活し、数奇な運命に翻弄される3人の若者が悪に疾走する姿を描き、上演時間が5時間を超えた。フランスのフロリアン・ゼレール作、ラディスラス・ショラー演出「La Mère母」「Le Fils息子」を連続上演した。「母」は夫(岡本健一)も子供(岡本圭人)も去っていき、心が崩壊する母を若村麻由美が熱演。「息子」では思春期の少年が心の葛藤を抱える姿を描いた。両作で子供を演じた岡本圭人が紀伊國屋演劇賞の個人賞を受賞した。東京芸術劇場は、舞台設備などの更新工事のため25年7月ま

で休館する。

世田谷パブリックシアターで、英国のエンダ・ウォルシュ作、白井晃演出「メディスン」は精神病院で演劇療法に取り組む男(田中圭)の物語。別役実の童話を原作に、野上絹代が構成・演出した音楽劇「空中ブランコのりのキキ」はサーカスで人気のあったブランコノリのキキを主人公に楽しくも切ない余韻が残る。プレヒト作、白井晃演出「セツアンの善人」は音楽劇として成功していた。築地小劇場で「人造人間」のタイトルで上演されたチェコのカレル・チャペック作「ロボット」がノゾエ征爾の潤色・演出で上演。AI(人工頭脳)をめぐる現代的なテーマの作品としてよみがえった。

座・高円寺は「ピアノ物語」シリーズで、新作として、クララ・シューマンと夫ロベルト・シューマン、恋人ブラームスとの物語をシライケイタ作・演出で上演された。

神奈川芸術劇場は、沖縄の視点から沖縄を描いた兼島拓也作、田中麻衣子演出「ライカムで待つとく」を再演した。キッズ・プログラムの加藤拓也作・演出「らんぼうものめ」は、乱暴者の少年が神々と出会う不思議な冒険の物語。藤田俊太郎の演出、河合祥一郎の新訳で「リア王の悲劇」を上演し、木場勝巳は圧倒的な台詞術で新たなリア王を造形した。

さいたま芸術劇場は、蜷川幸雄の「シェイクスピアシリーズ」を吉田鋼太郎のもとで「シリーズ2」として再スタート。第1弾「ハムレット」は柿澤勇人の疾走するハムレットが新鮮。劇団はえぎわとの共同制作で、はえぎわ主宰のノゾエ征爾が演出した「マクベス」は上演時間が1時間45分と省エネのマクベスだった。

調布のせんがわ劇場は演出家の小笠原馨が芸術監督に就任。第1弾のバーナード・ショー作「ドクターズジレンマ」は、医者たち(佐藤誓ほか)と天才芸術家が一人の女性をめぐる火花を散らす。

パルコ劇場は、劇団ロロの三浦直之作・演出「最高の家出」は結婚に疑問を抱き家出した女性を主人公にした迷走劇。パトリック・ネス原作、サリー・クックソン演出「モンスター・コルズ」は孤独な少年(佐藤勝利)がモンスターとの遭遇から真実を語る作品。ショーン・ホームズ演出「リア王」で段田安則がリアに初挑

戦した。青木豪作・演出「あのよこのよ」は明治初期の東京を舞台に浮世絵師(安田章大)を主人公にした痛快時代劇。森新太郎演出「ハムレットQ1」では吉田羊がハムレットに挑んだ。ヴァージニア・ウルフ原作、栗山民也演出「オーランド」は一夜にして女性へと変貌する青年貴族(宮沢りえ)が真実の私を追い求める。阿部修英作、東憲司演出「破門フェデリコへくたばれ十字軍」は世界を敵に回しても前人未踏の道を歩もうとした皇帝フェデリコ(佐々木蔵之介)の物語。ジョー・シン普森作、トム・モリス演出「Touching the Void タッチング・ザ・ヴォイド」は壮絶な遭難事故に直面した登山家(正門良規)の実話をもとにした人間ドラマ。

シアターコクーンは建て替えのため休館中で、新宿の「THEATER MILANO-Za」で上演を続けた。三浦大輔作・演出「ハザカイキ」はスクープを狙う芸能記者(丸山隆平)が変容する価値観に翻弄される。松尾スズキ作・演出「ふくすけ2024 歌舞伎町黙示録」は薬剤被害で障害を持った少年フクスケ(岸井ゆきの)をめぐる、悪意と情愛に突き動かされながら必死にもがく人々の姿を毒々しくも力強く描いた。赤堀雅秋作・演出「台風23号」は、台風が迫る海沿いの町を舞台に、そこに生きる人々(森田剛、間宮祥太郎)の姿と交流を描いた。

2024年に創立80周年を迎え、11月には80周年式典を俳優座劇場で行った俳優座は、ガストン・サルヴァトーレ作「スターリン」で24年の幕を開けた。若手演出家3人が同一戯曲にそれぞれ挑む意欲的な企画。イブセン作「野がも」は眞鍋卓嗣の演出で、大人たちの優柔不断さが少女の悲劇を招く。プレヒト作「セツアンの善人」は田中壮太郎の演出で、桐朋芸術短大の学生たちも客演した。シェイクスピアの「リア王」をもとに東憲司が明治末期の炭鉱を舞台に書き換えて演出した「慟哭のリア」で岩崎加根子が女炭鉱主役で主演し、紀伊國屋演劇賞の個人賞を受賞した。

代表が演出家の鶴山仁に代わった文学座の幕開けは、スイスのマックス・フリッシュ作、西本由香演出「アンドーラ」。隣国からの侵略の噂が漂う平和な国アンドーラをめぐる寓話劇。鶴山演出「オセロ」で病気休養した横田栄司が

オセロー役に復帰した。永山智行の新作を五戸真理枝が演出した「石を洗う」は九州南部の小さな集落を舞台に生きる意味を問う。瀬戸口郁作、西川信廣演出「摂」は舞台美術家として6000を超える作品を手がけた朝倉摂の半生を描いた。

民藝は、中島京子の小説をもとに小池倫代脚本、丹野郁弓演出「やさしい猫」で日本の入管行政に翻弄される人たちを描いた。木下順二作、丹野演出「オットーと呼ばれる日本人」は緊迫する世界情勢の中でスパイ活動に身を投じた男の物語。ふたくちつよし作、中島裕一郎演出「ミツバチとさくら」は高齢化の中で人生の幸せを求める人たちをユーモラスに描いた。クリスティン・ルーネズ作、デジレ・ゲーゼンツヴィ脚本、小笠原響演出「囲われた空」は第二次世界大戦末期のウイーンを舞台に、ヒトラーに忠誠を誓う少年とその一家に匿われたユダヤ人女性との切なく儂い物語。

創立70周年の青年座は「創作劇の上演」という創立の原点通り、若手からベテランまでの新作が続いた。竹田モモコ作、磯村純演出「ぼつちりばあの世界」は寂れた海辺の市営キャンプ場を舞台に、人と人が知り合うことの難しさを描いた。マキノノゾミ作、宮田慶子演出「ケエツプロウよ〜伊藤野枝ただいま帰省中」は大正時代の女性活動家伊藤野枝を主人公に、そのまっすぐな生き方を好演した那須凜は、紀伊國屋演劇賞の個人賞を受賞した。別役実作、金澤菜乃英演出「諸国を遍歴する二人の騎士の物語」は死を待ち続ける老騎士の物語で、山本龍二、山路和弘の両ベテランが共演した。若手の池内風作、磯村純演出「穏やかな人と機」は中堅介護用品製造会社で働く人々の今と昔の変貌が苦い作品。

創立60周年を迎えた青年劇場の篠原久美子作、五戸真理枝演出「マクベスの妻と呼ばれた女」は名前を持たないマクベス夫人と女中たちの葛藤を描いた。福山啓子作・演出「深い森のほとり」は未知のウイルスと格闘する科学者の物語。

文化座は、火野葦平の長編小説「花と龍」を東憲司作、鶴山仁演出で舞台化。北九州若松を舞台に正義を貫いた玉井金五郎(藤原章寛)の半生を描く。アトリエ公演で内藤裕子作・演出「紙

ノ旗」を上演。地方議会を舞台に、少しでも前に進もうと奮闘する人々の群像劇。

劇団昂は、スコット・マクファーソン作、田中壮太郎演出「マーヴィンズルーム」を上演。介護、互いの確執など過酷な現実に向き合う家族の姿を描いた。サイモン・ステイーヴンス作、眞鍋卓嗣演出「広い世界のほとりに」は、ある事故をきっかけにすれ違った家族の再生の物語。

演劇集団円は、ミシェル・マルク・ブシャー作、山上優翻訳・演出「L.G.が目覚めた夜」は母の死をきっかけに再会した兄弟が封印された家族の秘密と向き合う物語。小松台東の松本哲也作・演出「コウセイネン」は、罪を犯して出所した青年を取り巻く人間模様を描いた。

東演は、原爆で犠牲となった移動劇団「桜隊」を描いたシライケイタ脚本、松本祐子演出「獅子の見た夢」を再演。創立65周年記念としてゴリーキー作、ロシアのV・ベリャコフヴィッチ、O・レウシン演出「どん底」を上演した。

新宿梁山泊は、唐十郎作「おちよこの傘もつメリー・ポピンズ」を金守珍演出でテント上演し、中村勘九郎、豊川悦司、寺島しのぶが客演。同じく唐作、金演出「ジャガーの眼」とともに梁山泊は紀伊國屋演劇賞の団体賞を受賞した。

劇団銅鑼の関根信一作、磯村純演出「星を追う人」は、新星を発見したアマチュア天文家を主人公に追うことを諦めなかった人たちの物語。

棧敷童子は創立25周年を迎え、サジキドウジ作、東憲司演出「阿呆ノ記」は、因習と恩讐が渦巻く辺境の地を舞台にした物語。劇団として60本目となるサジキドウジ作、東演出「荒野に咲く」は劇団員のみのお出演で、崩壊していく家族の姿を描く。

二兎社は、永井愛作・演出「パートタイマー・秋子」を21年ぶりに上演。夫の会社が倒産し、スーパーで新米パートとして働く秋子(沢口靖子)が社会の現実と直面する姿を苦い笑いで描いた。「こんばんは、父さん」は廃墟の工場で年代の違う3人の男たちによる虚々実々の駆け引きを描いた。

Pカンパニーの山谷典子作、小笠原響演出「オセロの横顔」は冤罪について弁護士の視点で描いた作品。くるみざわしん作、富士川正美演出「あの瞳に透かされる」は、大手カメラ会社の元

慰安婦写真展中止事件をベースに表現の自由と責任をテーマにした。

風姿花伝プロデュースによるラーシュ・ノレーン作、上村聡史演出「夜は昼の母」は父、母、息子2人の家族の崩壊を描いた会話劇。

ホリプロは、三谷幸喜作・演出「オデッサ」を上演した。米国のオデッサを舞台に、警察に拘束された英語の話せない日本人旅行者(迫田孝也)、日本語が話せない日系の警察官(宮澤エマ)、通訳としてやってきた日本人青年(柿澤勇人)の3人が密室で繰り広げる会話バトル。源孝史作、蓬萊竜太演出「中村仲蔵〜歌舞伎王国下剋上異聞」は、江戸時代にドン底から看板役者に駆け上がった男(藤原竜也)の痛快出世物語。宮崎駿監督の初アニメを舞台化した、イスラエルのインバル・ピント演出・振付・美術の「未来少年コナン」は超人的な運動神経を持つ正義感の強い少年コナン(加藤清史郎)を主人公にした冒険劇。

シスカンパニーの別役実作、加藤拓也演出「カラカラ天気と五人の紳士」は、棺桶を担いでやってきた5人(堤真一、溝端淳平ら)をめぐる物語。北村想の脚本による日本文学シアター第7弾は、織田作之助の「夫婦善哉」をもとにした「夫婦パラダイス」。小さな居酒屋に流れ着いた柳吉(尾上松也)の不思議な体験を描き、演出は寺十吾。ケラリーノ・サンドロヴィッチがチェーフ作品に挑むシリーズの最終作「桜の園」は2020年に初日直前にコロナ禍で公演中止になったが、今回は天海祐希が主演。一家の栄枯盛衰が笑いで増幅された好舞台。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は、東京裁判の真実を問う栗山民也演出「夢の泪」、原爆が投下された長崎の母(富田靖子)と息子(松下悦平)を描く、井上原案、畑澤聖悟脚本、栗山民也演出「母と暮せば」、松尾芭蕉の半生を描いた鶴山仁演出、内野聖陽主演「芭蕉通夜舟」、戦中戦後に生きた林芙美子(大竹しのぶ)の音楽評伝劇「太鼓たたいて笛ふいて」(栗山民也演出)を上演した。

名取事務所は、韓国のキム・ミンジョン作、眞鍋卓嗣演出「509号室 迷宮の設計者」は韓国の民主活動家を拷問した一室を舞台にした作品。エーシーオー沖繩との共同制作による内藤裕子作・演出「カタブイ、1995」はある家族を通

して長く続く沖繩の不条理を浮き彫りにした。堀江安夫作、桐山知也演出「火の方舟」は家族の一夜の会話から戦後日本を問う作品。キム・ミンジョン作、桐山知也演出「最後の面会」はオウム真理教による地下鉄サリン事件の実行犯に迫る。アイルランドのカーメル・ウィンターズ作、寺十吾演出「メイジー・ダガンの遺骸」はバラバラの家族が抱える過去をブラックな笑いで描いた。

トムプロジェクトの日向十三作、小笠原響演出「かへり花」は過去と現在が入り混じるファンタジックな作品。

ゴーチブラザーズのダンカン・マクミラン作、杉原邦生演出「モンスター」は新米教師(風間俊介)が問題児と対峙する中で抱える闇も明らかになる。

トータルステージのシュテファン・ツヴァイク原作、行定勲演出「見知らぬ女からの手紙」は、著名なピアニストに届いた、名も知らぬ女(篠原涼子)からの手紙で明かされる究極のラブストーリー。

エイバックス・ライヴ・クリエイティヴは、テネシー・ウィリアムズ作、鄭義信演出「欲望という名の電車」は、初舞台の沢尻エリカがランチに果敢に挑んだことで話題になった。

ミックス・ゾーンのサラ・ルール作、白井晃演出「エウリディケ」はオルフェの物語を現代に置き換えた作品。永井愛作、保坂萌演出「片づけたい女たち」は、ゴミ屋敷と化した部屋で人生の整理整頓を迫られる女たちの物語。

unratoのローレン・ガンダーソン作、大河内直子演出「Silent Sky」は、男性社会の中で宇宙を追い続けた女性たちが主人公の佳作舞台。

2025年4月で閉館が決まっている俳優座劇場はプロデュース公演として、作詞家サトウハチローと母を軸にした堀江安夫作、横山由和演出「音楽劇母さん」、プリーストリイ作、八木柊一郎脚本、西川信廣演出による社会派ミステリー「夜の来訪者」を上演した。

はやし・なおゆき

2020年に退社するまで日刊スポーツで主に演劇・演芸を担当。文化庁芸術祭、芸術選奨、鶴屋南北戯曲賞などの選考委員を務め、現在は日本芸術文化振興会基金部PO。



[ミュージカル]

## 2024年のミュージカル —ますます多種多様に

横溝幸子

2024年のミュージカル界はコロナ禍から立ち直り、「レ・ミゼラブル」「ピリー・エリオット」など大型ミュージカルの再演をはじめ初演の1人ミュージカル「ライオン」の小品まで、ミュージカル公演は限りなくふえ続けた。2.5次元作品を加えると1年間の上演本数は数えきれない。原作も小説、映画、ドラマ、アニメ、ゲーム、漫画と多彩。テーマも人種差別、戦争、暴力、芸術家の苦悩、親子兄弟をめぐる家族の問題や、恋愛、ミステリと一さまざまだ。

### 帝国劇場の改築

東宝ミュージカルの拠点劇場である帝国劇場が、建て替えのため2025年2月末で興行を終了する。1911年の旧帝劇から現在の2代目帝劇は、1966年10月、中村萬之助の「二代目中村吉右衛門襲名披露興行」で新開場してから59年。「屋根の上のヴァイオリン弾き」「王様と私」「ラ・マンチャの男」「ミス・サイゴン」など多くの名作を上演し、日本の土壌にミュージカルを根付かせる大きな役割を果たしてきた。

帝劇の掉尾を飾るクロージング公演に選ばれたのは「レ・ミゼラブル」である。(12月16日～25年2月6日)。1987年の日本初演からくり返し上演され、3459回と東宝ミュージカル史上燦然と輝く作品である。帝劇公演終了後、6月16日までの全国ツアーで記録はさらに更新される。初演時、エポニーヌ役の島田歌穂が一躍スターの座におどり出たように、多くの役々でミュージカル俳優が生まれ、育った。クロージング公演もジャン・バルジャンは吉原光夫・佐藤隆紀のほか新たに劇団四季出身の飯田洋輔が加わり、ジャベールも伊礼彼方のほか、小野田龍之介がアンジョルラスから、石井一彰がアンサンプルから昇格するなど、顔ぶれが少しずつ変わり、新鮮味を保ち続けている。「モーツァルト！」(8月19日～9月29日)も同様で2000年の初演から8演目の今回、山口祐一郎のコラド大司教と市村正親の父レオナルドは初演から

変わらず、モーツァルトは3度目の古川雄大と初役でSix TONESの京本大我が加わった。

ジャニーズ事務所は名称をSTARTO ENTERTAINMENTに変更後も、帝劇公演は前年同様5ヵ月で、HiHi Jetsらの「Act ONE」(1月)ボクサーを巡る「DREAM BOYS」(10月)に堂本光一の「Endless SHOCK」が、4月、5月、11月と3ヵ月続いた。7月中旬から大阪・梅田芸術劇場、9月の博多座を経て帝劇で11月29日大千穂栄を迎えた。2000年11月の初演時は21歳の堂本光一は、帝劇史上最年少座長を記録。24年間演じ続けて上演回数は2128回。1961年から2009年にかけて演じた森光子の「放浪記」2017回の記録を更新した。1年足らずで再演した「ムーラン・ルージュ!ザ・ミュージカル」(6月20日～8月7日)は望海風斗・平原綾香のサティーンと井上芳雄・甲斐翔真の作曲家クリスチャンは初演と同じく熱演した。初演作品は人気コミック「ジョジョの奇妙な冒険 ファントムブラッド」(荒木飛呂彦原作 元吉庸泰脚本・歌詞 長谷川寧演出・振付)でジョジョ(松下優也・有澤樟太郎)とディオ(宮野真守)の対決が面白く描かれた。作曲にドーブ・アチアを起用したのは海外進出を狙ったものだろう。装置や演出の関係で2月6日の初日が12日に変更された。

### 東宝の多彩なレパートリー

東宝のミュージカル攻勢は、帝国劇場以外の劇場でも幅広く展開された。日生劇場のダスティン・ホフマン主演映画のミュージカル化「トッツィー」(ロバート・ホーン脚本 デヴィッド・ヤズベック脚本・歌詞 デイヴ・ソロモン演出)は初演作品。売れない俳優マイケルが女装して「ロミオとジュリエット」の乳母役を射止めてから売れ出し女優姿で活躍する。山崎育三郎の女装ぶりが大胆で美しく、笑いをとった(1月10日～30日)。オリジナル作品は「この世界の片隅に」(このの史代原作 上田一豪脚本・演出)。異に住む周作(海宝直人・村井

良大)と結婚した広島出身のすず(昆夏美・大原桜子)の居場所探し。歌手のアンジェラ・アキが初めてミュージカルの作曲に挑戦したのが話題になった(5月9日～30日)。再演物は3作品。「王様と私」(4月9日～30日)は北村一輝のシャム王と明日海りおの家庭教師アンナが新コンビ。「ニュージーズ」(10月9日～29日)は3年ぶり。新聞売りの少年(岩崎大昇)が新聞社社長の不当値上げに対してストライキで対抗する実話。新聞記者キャサリンに5月、宝塚歌劇団花組を退団したばかりの娘役トップスター星風まどかが起用された。4年ぶりの「天保十二年のシェイクスピア」(12月9日～29日)は、シェイクスピア全37作品と講談「天保水滸伝」をないまぜにした井上ひさし作品を宮川彬良の音楽で、演出の藤田俊太郎が祝祭音楽劇に作り上げた。ハムレットに当たるきじるしの王次(大貫勇輔)が歌う「問題ソング」は難曲だ。浦井健治の佐渡の三世次はリチャード3世そのもの。「リア王」のコーディリアに当たるお光のほか双子のおさちを唯月ふうかが早替わりで演じ分け、若手女優の実力を示した。

シアタークリエの公演はミュージカルが多かった。再演物は朝夏まなとの「モダン・ミラー」、石丸幹二の「ライムライト」。望海風斗の「next to nomal」は死去した息子が幻想の中で成長してゆき、いつも離れない。双極性障害に悩む母親の姿が見えていく。

オリジナル作品「CROSS ROAD」(4月22日～5月12日)も、バガニーニ(木内健人・相葉雅樹)が、100万回弾くと死ぬという契約を悪魔(中川晃教)と交わした。死が近付くにつれてのバガニーニの狂気が凄まじい。初演物では漫画が原作の「町田くんの世界」(安藤ゆき原作 ピンク地底人3号脚本・作詞 和田俊介作曲 ウォーリー木下演出)が、17歳の町田くん(川崎皇輝)の人の良さや初恋の甘さがほんわかと伝わった(3月31日～4月14日)。「tick.tick…BOOM!」(10月6日～31日)は「RENT」を書き上げる前のジョナサン・ラーソンの作品。売れない自分を抜いかねてチック、チックと頭の中を時が刻む音がするジョナサン(藪宏太)の焦りや苦悩がよく出ていた。

韓国ミュージカルが2作品初演された。「ファンテラー」(ハン・ジエウン脚本・歌詞 パク・

ヒョンスク音楽 栗山民也演出)は、韓国の作家ヘジン(浦井健治)にセファン(海宝直人)が東京留学中からヒカルの名前でファンテラーを出し続けた。ヘジンはヒカルを女性と思いこみ、恋心を抱くようになる。ヒカルは自分だと言い出せぬセファンの心の揺れをパワフルな音楽で表現する(9月9日～30日)。「ナビレラ」(パク・ヘリムオリジナル脚本・作詞 キム・ヒョウン作曲 桑原裕子上演脚本・日本語歌詞・演出)は、バレエダンサーを目指すチェロック(三浦宏規)に弟子入りする老人(川平慈英)。チェロックは老人に反発しながらしだいに心を通わせるうちに、自分もバレエに自信を持ち始め、老人は生きる勇気を得る。認知症になっても踊る仕草をする老人の姿が感動的。三浦はダンス力が抜群だ(5月18日～6月8日)。「プロデューサーズ」(11月8日～12月6日 東急シアターオーブ)は、プロデューサーのマックスに濱田崇裕、会計士レオは神山智洋の新コンビ。

東宝はミュージカル上演のほか作家や作曲家育成とミュージカルの底上げを狙って「Song writers SHOWCASE」(12月18日 シアタークリエ)を企画・制作した。日本・韓国・イギリス・アメリカから参加した12人の作品の中から1曲ずつ井上芳雄、中川晃教、霧矢大夢、イ・チュンジュらが歌い上げて披露した。新しいミュージカルを世に出す一つの試みが今後につながる。

## ホリプロ 梅田芸術劇場の企画力

ホリプロが初演した「カム フロム アウエイ」(アイリーン・サンコフ/デイヴィッド・ヘイン脚本・音楽・歌詞 クリストファー・アシュリー演出)は心暖まる作品だった。9・11アメリカ同時多発テロ事件で空港が閉鎖され、カナダ東端のガンダー国際空港に38機の乗員乗客7000人が降り立ち、一万人の地元民が暖かく迎え入れ交流した実話をミュージカル化した。浦井健治、安蘭けい、咲妃みゆ、田代万里生、濱田めぐみ、柚希礼音ら12人の俳優が旅客や現地住民を6役から13役演じ分ける100分間ノンストップ作品。音楽も多国籍の乗客を考えて民族楽器を使用した。演出家はこの作品でトニー賞演出家賞を受賞(3月7日～25日 日生劇場)。舞台は読売演劇賞選考委員特別賞に選ばれた。

東京建物Brillia HALLでの再演2本。「スウィニー・トッド」(3月9日～30日)は、市村正親のトッドと人肉でパイを焼く大竹しのぶのミセス・ラヴェットは5度目の名コンビ。ソンドハイムの難曲を歌いこなしていた。

「ビリー・エリオット リトル・ダンサー」(7月27日～10月26日)は4年ぶり3度目。サッチャー政権下、ストライキをする炭鉱夫の父(益岡徹・鶴見辰吾)に隠れてダンス教室に通う幼いビリーの才能を見出したウイルクソン先生(安蘭けい・濱田めぐみ)によって名門バレエ学校を目指すストーリー。11歳前後しか演じられないビリー役は、1375人の中から選ばれた浅田良舞ら4人は実力十分。「ピーターパン」(7月24日～8月2日 国際フォーラム ホールC)は1981年初演時の榊原郁恵から数えて11代目の山崎玲奈。長谷川寧演出は3幕仕立ての構成舞台のため幻想性が薄い感じがする。

梅田芸術劇場の「ボディガード」(2月18日～3月3日 東急シアターオーブ)は3演目でレイチェル役は新妻聖子に新たにMay J.が加わったWキャスト。

再演の「VIOLET」(4月7日～21日 東京芸術劇場プレイハウス)は初出演の三浦透子和屋比久知奈がヴァイオレットの暗さと心の揺れを出し、原田優一の伝道師の明るさと対象的。6度目の「ロミオとジュリエット」(5月16日～6月10日 新国立劇場中劇場)は、次世代キャストを抜けてき。ロミオは岡宮来夢・小関裕太、ジュリエットは吉柳咲良、奥田いろは。若手俳優が次々活躍する。2人の秘密結婚がスマホで町中に知れ渡る現代版の演出は、小池修一郎だ。

宝塚で初演された「DEATH TAKES A HOLIDAY」(トーマス・ミーハン ピーター・ストーン脚本 モーリー・イエストン作詞・作曲 生田大和潤色・演出)を男女混合版で上演した。自動車事故でも無傷だった公爵の娘グラツィア(山下リオ・美園さくら)と死神(小瀧望)との愛の物語(9月28日～10月20日 シアターオーブ)。1人ミュージカル「ライオン」(ベンジャミン・ショイヤー脚本・作詞・作曲 アレックス・ステンハウス ショーン・ダニエルズ演出)は、英国からの来日版のアレックス・アレクサンダー・テイラーと日本版の成河との競演が刺激的だった。10歳でギターを教えて

くれた父との絆が14歳で断絶した。それが父の死後も心の重荷になる。愛、悲しみ、傷、いやしと再生の物語を5本のギターを使い分け、歌い、演じる。「ライオンはなぜライオンなんだ」と謎かけのような父の歌。父と息子の関係や複雑な心情が心に突きささった。1年がかりで稽古をした成河は努力賞ものだ(12月19日～23日 品川プリンスホテルクラブex)。

オリジナル作品「テラヤマキャバレー」(池田亮脚本)は、寺山修司(香取慎吾)が死の直前、脳内で何を考えたのか。生と死が交錯するキャバレーを舞台に3本のマッチを持った死(風七瑠海)が現われ、1本ずつマッチをすると、お初・徳兵衛の「曾根崎心中」、三島由紀夫の割腹、寺山の両親や九条映子らが次々登場する。寺山作詞の「さよならだけが人生だ」など16曲が歌われる。混沌とした不思議な作品。デヴィッド・ルヴォーの演出が目目された。風七は宝塚歌劇団専科在籍のまま、外部出演を果たした(2月9日～29日 日生劇場)。宝塚歌劇団で植田紳爾作「ベルサイユのばら」が初演されてから50年。「ベルサイユのばら50年～半世紀の軌跡」は、1974年月組初演時のオスカル(榛名由梨)、マリー・アントワネット(初風諄)はじめ安奈淳、安寿ミラ、日向薫らの宝塚OGの出演者50人によるショー。「ベルばら」の威力を見せつける超満員の公演だった(5月14日～19日 梅田芸術劇場 26日～6月9日 Brillia HALL)。

宝塚を退団したばかりの柚香光や月城かなとの初リサイタルも梅田芸術劇場が主催した。

## 劇団四季の自信作「ゴースト&レディ」

「美女と野獣」(舞浜アンフィシアター)「アラジン」(電通四季劇場(海))「ライオンキング」(有明四季劇場)「アナと雪の女王」(JR東日本四季劇場(春))とロングラン公演が続く劇団四季が、漫画が原作の「ゴースト&レディ」(藤田和日郎原作 高橋知伽江脚本・歌詞 富貴晴美作曲・編曲)をミュージカル化した。「ノートルダムの鐘」のチェイス・ブロック振付、スコット・シュワルツ演出と多分野の第一線クリエイターが集結した。看護という偉大な仕事をなし遂げたナイチンゲール(谷原志音・真瀬はるか)の功績の背後に、娘時代に出会ったシアターゴースト(萩原隆臣・金本恭潤)との約束と支え

があったという筋立て。「人はどれだけ思い合えるか」という作品テーマは「この人生は生きるに値する」という四季の理念を浮き彫りにした。「これが戦争なのか」「私の使命」などミュージカルナンバーは23曲(5月6日～11月11日 四季劇場(秋))。

25年4月6日開幕の海外新作ミュージカル「バック・トゥ・ザ・フューチャー」の上演が1月24日の記者会見で早くも発表された。1985年公開映画のミュージカル化で発表会場に置かれた実物大のタイムマシン・デロリアンの存在が舞台への期待をかきたてた。子どもたちの招待プロジェクト「こころの劇場」は「ガンバの大冒険」「エルコスの祈り」「ふたりのロッテ」の3作品を140都市で400回上演し、50万人の児童が観劇した。東京のほか大阪、京都、名古屋、広島、全国と公演が同時に全国展開されるのが四季の強み。舞台公演回数は2995回と前年を上回り、観客動員数は326万4640人に達した。

### 110周年を迎えた宝塚歌劇団

創立110周年記念を祝う式典や大運動会などが中止された。23年9月29日に起きた宙組娘役生の自死事件がなかなか解決せず、その遅れが一因。死の背景となった過剰業務や上級生らによるパワーハラスメントがあったとする遺族側の主張を歌劇団側は3月におおむね認めた上で謝罪した。宙組は6月20日からの宝塚大劇場公演まで舞台がなくなり、芹香斗亜・春乃さくら新トップコンビお披露目も1時間20分のショー「ル・グラン・エスカリエ」(齋藤吉正作・演出)のみと寂しいものになった(東京宝塚劇場は7月20日～8月25日)。芹香斗亜は25年4月27日の東京大千秋楽で退団。次期トップは桜木みなとと発表された。労働時間短縮の要請で公演数が減り、新人公演の翌日は休演日に決まった。

本公演は宝塚大劇場から東京宝塚劇場で大千秋楽を迎えるが、宙組公演の影響を受け、日程がかなり変則的になった。東京宝塚劇場中心に24年の公演を見ると雪組と星組、花組が2回ずつ公演した。雪組「ボイルド・ドイル・オン・ザ・トイル・トレイル」(生田大和作・演出)のほか、ショー「FROZEN HOLIDAY」(野口幸作作・演出)にフランク・ワイルドホーンが1曲を提供した(1月3日～2月11日)。次の雪組

公演の東京大千秋楽「ベルサイユのばら―フェルゼン編(植田紳爾作・演出 谷正純演出)でトップスター彩風咲奈が退団した。彩風の端正なフェルゼン、夢白あやがマリー・アントワネット、次期トップの朝美絢がオスカル。「愛の巡礼」「愛あればこそ」など名曲揃いで懐かしかった(8月31日～10月13日)。

星組「RRR×TAKA"R"AZUKA ～√Bheem～」(谷貴矢作・演出)はラージャ・マウリ監督映画のミュージカル化。英国植民地下のインドでの差別と圧制に立ち向かうコムラム・ビームの礼真琴らが踊る「ナートウ」が圧巻だった(2月23日～4月6日)。礼真琴は三谷幸喜監督映画のミュージカル化「記憶にございません」(石田昌也作・演出)では、投石で記憶喪失になる総理大臣を演じたのが予想外の役どころだった。娘役トップの舞空瞳が退団。歌劇団は25年8月に礼真琴が退団するまで娘役トップを決めない方針を打ち出した(10月19日～12月1日)

花組「アルカンシェル」(小池修一郎作・演出)は1本立て公演。ナチスに抵抗するアルカンシェルのショーダンサー(柚香光)と歌手(星風まどか)の話で、柚香・星風トップコンビの退団公演。「羽根の重みは大変なもの。宝塚は私の青春」と柚香は爽やかに卒業した(4月14日～5月26日)。「エンジェリックライ」(谷貴矢作・演出)は永久輝せあ・星空美咲トップ・コンビのお披露目公演。正月をまたぐ変則公演になったのが珍しい(12月7日～25年1月19日)。

月組「Eternal Voice 消え残る想い」(正塚晴彦作・演出)はメアリー・スチュアートの首飾りをめぐる話。考古学者の月城かなとと超能力を持つ女の海乃美月トップコンビのサヨナラ公演。ショー「Grande TAKARAZUKA110!」(中村一徳作・演出)に110期生10人が東京で初お目見得した(6月1日～7月7日)。次期トップは鳳月杏と天紫珠李。

本公演のほか星組は礼真琴がブロードウェイ・ミュージカル「BIGFISH」(5月30日～6月16日 シアターオーブ)と暁千星主演「夜明けの光芒」(6月14日～20日 Brillia HALL)と2組にわかれての公演。聖乃あすか主演の花組「Lie Fie—愛しい人」は、作・演出の生駒怜子のデビュー作品(7月17日～24日 日本青年館)。雪組の朝美絢のトップお披露目は韓国ミュージカ

ル「愛の不時着」(ハク・ヘリム台本・作詞イ・サンウン作曲 中村一徳潤色・演出)。韓国から2月と7月の来日公演は韓国の富豪令嬢が主役だったが、宝塚版は北朝鮮のエリート将校を主役にしての恋物語に変えている(11月30日～12月15日Brillia HALL)。

24年は柚香光、月城かなと、彩風咲奈と3人のトップスター、星風まどか、海乃美月、舞空瞳と3人の娘役トップスターのほか大輝真琴、和希そらのベテランから109期の若手まで39人が退団した。

## 海外物で目立つ韓国ミュージカル

ブロードウェイ・ミュージカル「20世紀号に乗って」(東京グローブ座)、1986年から上演が続く「アニー」(日本テレビ)、「9to5」(TBS)、「チャーリーは何処だ」(エイベック)、「イン・ザ・ハイツ」(アミューズ)など多くのプロダクションがミュージカルを手がける中で韓国ミュージカルが増えている。東宝が「ナビレラ」「ファンレター」、宝塚歌劇団は「愛の不時着」。殺人のたびに交響曲を完成させる「狂炎ソナタ」、高校生の幽霊が、いじめを受ける高校生について、自信を持たせる「伝説のリトルバスケットボール団」、作家の未発表原稿をめぐる裁判劇「Hope」、白杖を使わぬ盲学校に転校してきた白杖をつく盲学生によって事件が起きる「燃ゆる暗闇にて」など暗い作品が多い。

韓国ミュージカルアワードで作品賞、脚本賞、音楽賞の3冠に輝いた「ラフヘスト〜残されたもの」は、鬼才と言われた詩人イ・サン(相葉裕樹)と韓国抽象芸術の先駆者キム・ファンギ(古屋敬多)と2人の天才を夫に持った評論家で画家のキム・ヒャンアン(ソニン)の人生を史実に基づいて描いた作品。パワフルな歌と演技が印象的。文学座の稲葉賀恵が初めてミュージカルを演出した(7月18日～28日 東京芸術劇場シアターイースト)。

## オリジナル作品の幅広さ

どんなテーマでもミュージカルにしてしまうのがオリジナル作品だ。歴史に材をとったワタナベエンターテインメント制作「イザボー」(末満健一作・演出・作詞 和田俊輔音楽・作詞)が凄まじい。14世紀、フランスのシャルル6

世(上原理生)と結婚、フランス最悪の王妃と言われたイザベルを望海風斗が奔放に演じた(1月15日～30日 Brillia HALL)。ライト兄弟と2人を支えた妹。その3人の生涯を描いた「翼の創世記」(石丸さち子企画・台本・作詞・演出 森大輔作曲)は、BLUE SQUARE YOTSUYA(11月29日～12月25日)の小空間での上演だった。

芸術家に材をとった「モンパルナスの奇跡」(G2台本・作詞・演出 しみむら周平作曲・編曲)は酒に溺れヌード画を描くモディリアーニ(浦井健治)の才能を認める夫妻(稲葉友・福田えり)、愛するモデルのジャンヌ(宮澤佐江)らが登場する(6月15日～23日 よみうり大手町ホール)。「無伴奏ソナタ」(オースチン・スコット・カード原案 成井豊脚本・作詞・演出 杉本雄治音楽)はすべての職業が幼児期のテストで決まり、2歳で閉じ込められ作曲させられたクリスチャン(平間壮一)の残酷な人生は、後味が悪い。「テラヤマキャバレー」のほか、寺山修司に見出された三上博の8年ぶりの劇場公演が「三上博歌劇」(寺山修司作 J.A.シーザー音楽・美術・演出)。寺山の詩に曲をつけて歌い、詩を朗読した(1月7日～14日 紀伊國屋ホール)。3演目の「母さん」(堀江安夫作 新堀雄音楽 横山由和演出)は母(土居裕子)の前ですねて暴れる詩人のサトウハチロー(阿部裕)を描いた作品(3月8日～10日 俳優座劇場)。「虹のかけら〜もうひとりのジュディ」(三谷幸喜構成・演出 荻野清子音楽監督 本間憲一振付)はジュディ・ガーランドの付き人というもう一人のジュディが語り、歌う設定。最後に三谷が「そんなジュディなどいるわけがない」とタネ明かしをする。戸田恵子の1人ミュージカルで、6月にニューヨークのカーネギー・ワイル・リサイタルホールでも2日間公演した(5月31日～6月6日 博品館劇場)。

ミステリー物ではイツフォーリーズの「鉄鼠の檻」(京極夏彦原作 板垣恭一上演台本・作詞・演出 和田俊輔作曲)は、明慧寺の僧侶殺人事件を京極堂こと中禅寺秋彦(小西遼生)が解決する話で、僧侶に扮した俳優がぞろぞろ登場する(6月14日～24日 紀伊國屋サザンシアター)。音楽座「SUNDAY」は、アガサ・クリスティの小説「春にして君を離れ」のミュージカル化(相川タローとワームホールプロジェクト

脚本・演出高田浩 金子浩介作曲)。幸せな結婚生活を送ってきたジョー(高野菜々)が砂漠に閉じ込められ、人生を振り返る心理ミステリー(6月12日～17日 草月ホール)。

ハマナカトオルが主宰するミュージカル座は、「サイト」「三ツ星アラカルト」「ひめゆり」など、オリジナル作品を上演し続けている。

東山義久、三浦宏規、蘭乃はなを中心にして12人のダンサーが一体となって躍る「BOLERO—最終章」が息もつかせぬ迫力ある舞台だった(7月18日～25日 よみうり有楽町ホール)。OSK「レビュー夏のおどり」はトップスターの楊琳・舞美りらコンビの退団公演(8月7日～11日新橋演舞場)。次期トップの翼和希は、笠置シズ子のNHK朝ドラ出演で有名になった。

城田優が日本発のショーを作ろうとプロデュースした「TOKYO」はもうひとひねり欲しかった(5月14日～19日 シアターオーブ)。

### 来日公演の「RENT」は日米合作に

来日公演は殆んどが東急シアターオーブでの公演。ケン・ヒル版「オペラ座の怪人」は7度目の来日(1月17日～28日)。「シカゴ」(4月25日～5月8日)「シアターアクト～天使にラブソングを」(7月3日～21日)「Blast!」(7月30日～8月12日)「ブロードウェイ クリスマス・ワンダーランド」(12月14日～25日)はおなじみの舞台。「RENT」は1998年の日本版初演時にマークを演じた山本耕史が、アメリカ人キャストの中で26年ぶりにマークを演じたことで日米合作になった。英語で演じる山本耕史が達者な演技を見せた(8月21日～9月8日)。マシュー・ボーンの「ロミオとジュリエット」は、近未来の矯正施設で抑圧される中で恋という大胆な設定(4月10日～21日)。初来日公演「プリティ・ウーマン」はロサンゼルススの娼婦の華麗なサクセス物語(9月11日～16日 新国立劇場オペラハウス)。「ブルーマン」はミラノ座での公演(8月19日～9月1日)。初来日の1人ミュージカル「ライオン」が収穫だった。

### 中堅・若手の活躍が目立つ

市村正親、石丸幹二、井上芳雄らベテランに続き、中堅、若手の活躍の場が広がった。年間を通して男優では、浦井健治が「カム フロム

アウエイ」「モンパルナスの奇蹟」「天保十二年のシェイクスピア」「ファンレター」で主演。平間壮一も「イン・ザ・ハイツ」「無伴奏ソナタ」「テラヤマキャバレー」、海宝直人は「この世界の片隅に」「ファンレター」、三浦宏規が「ナビレラ」「BOLERO」と大役を演じ続けた。若手では「ジョジョの奇妙な冒険」のジョジョ役に松下優也と有澤樟太郎が抜てきされた。来日公演の「RENT」に出演の山本耕史、1人ミュージカル「ライオン」に挑んだ成河は、努力が報いられた。

女優では、宝塚歌劇団の男役トップスターだった望海風斗が「イザボー」「ムーラン・ルージュ!ザ・ミュージカル」「next to nomal」での力強い演技が目立った。安蘭けいも「カム フロム アウエイ」で何役も演じ分け、「ピリー・エリオット」でのウィルキンソン先生の乾いた演技が見事だった。宝塚歌劇団の現役では、礼真琴が「RRR」「記憶にごさいます」「BIG FISH」で実力を発揮。若手では「VIOLET」の屋比久知奈、「天保十二年のシェイクスピア」の唯月ふうかが成長した舞台を見せた。

音楽では、「イザボー」「鉄鼠の檻」「町田くんの世界」を作曲した和田俊輔、「天保十二年のシェイクスピア」の宮川彬良が目目された。

演出家では「VIOLET」「天保十二年のシェイクスピア」の藤田俊太郎、「9to5」「next to nomal」の上田一豪、「イザボー」の末満健一、「鉄鼠の檻」の板垣恭一、「テラヤマキャバレー」のデヴィット・ルヴォーが目立った。

訃報は「ウエストサイド物語」のチタ・リベラ、「コーラライン」の浜畑賢吉、「ライオンキング」の下村青(尊則)、「屋根の上のヴァイオリン弾き」の西田敏行、「花のオランダ坂」の加茂さくら。懐かしい舞台姿が目浮かぶ。

### よこみぞ・ゆきこ

演劇評論家。日本演劇協会理事。都民劇場評議員。歌舞伎サークル企画委員。時事通信社文化部編集委員を経て文化庁芸術祭審査委員、芸術文化振興会演劇専門委員、日本大学芸術学部非常勤講師を歴任。第51回新劇製作者協会賞受賞。著書に「夢を語る役者たち」ほか。

## [地方演劇]

## 2024年の地方演劇概況

森 洋三

## 能登半島地震で能登演劇堂に大きな被害

2024年の元日午後4時過ぎに北陸地方を襲った能登半島地震。最大震度が輪島市で7(マグニチュード7.6)、仲代達矢が名誉館長を勤める七尾市中島文化センター「能登演劇堂」(ワンスロープ型651席)のある七尾市(人口46,607人)も震度6強に見舞われ、演劇堂の建物や照明器具、駐車場などに大きな被害が出た。同演劇堂は3月16・17日に予定されていた二兎社「パートタイマー秋子」の公演中止、さらに10・11月予定の無名塾公演「肝っ玉おっ母と子供たち」(プレヒト作、隆巴演出)を2025年5月30日～6月22日へ延期して令和16年能登半島地震復興公演・無名塾能登限定公演として上演することを決めた。

同演劇堂では劇場舞台の復興再開を前に24年6月に展示ホール等、一部施設の営業を再開、9月7・8日にノトゲキ番外特別公演「能登版・銀河鉄道の夜」(宮沢賢治原作、中村大地構成・演出)が展示ホールを使い入場無料で上演された。ノトゲキは演劇を学ぶ大学生による能登滞在制作。同公演には中島町出身の俳優勢登健雄、瀧腰教寛も加わっての上演になった。

演劇堂の正式な再開は25年3月に復興祈念公演として「まつとおね」(小松江里子原作・脚本、中村歌昇演出)でスタート、その後に無名塾「肝っ玉おっ母と子供たち」と続く。能登演劇堂は仲代が劇場建設にも監修者として加わり、舞台後方の大扉が開くと自然の光景が広がる。無名塾は2009年に「マクベス」を50日間上演。野外に本物の馬が登場、さらに約100人の地元高校などのエキストラ出演者が野外に広がるバーナムの森となって移動して観客を驚かせた。ちなみに同公演は07年3月の能登半島地震(七尾・輪島市で震度6強)からの復興を願って能登限定公演として企画されたもの。同地震では演劇堂に被害はなかった。

師走に入って気になるニュースが。神戸市が2026年に公立中学校の「部活」を全面的に終了

させ、地域のスポーツ・文化団体による「クラブ活動」形式に移行するという発表だ。部活の外部委託は、少子化で学校単位の活動が困難になってきている状況、指導に当たっている教職員の長時間労働問題が背景にある。土日を中心にした外部委託はすでに各地で行われているものの、平日も含めた完全移行は初のケースという。

神戸市教委(福本靖教育長)は中学生が放課後・休日に校区の枠を超えて、さまざまなスポーツ・文化芸術活動に参加できる新しい仕組み「KOBE◆KATSU(コベカツ)」を立ち上げ、25年1月に運営団体の募集を始めた。登録団体の認定を受け、受け入れ可能な団体では25年9月頃から、当面は部活と並行して活動をスタートさせたいという。令和5年現在、神戸市の公立中学校数は83校(うち分校3)、生徒数は約33,000人。近年は“部活離れ”がかなりのスピードで進行しているというが、同市教委によると、従来のスポーツ・文化部の種目のほか、例えばボルダー、釣り、料理など「子供たちがやりたいこと」が多様化していて、子供たちの幅広い選択肢からやりたい活動を選ぶことができるとしている。ただ私的な感想になるが、筆者が小学生のころ山本安英とぶどうの会の「夕鶴」(木下順二作)が来校、強い感動を残した。スポーツも同様であろうが、感受性豊かな子供たちが、学校内という安全、便利なエリアの中で文化芸術に親しむ身近な機会が「部活」である。「KOBE◆KATSU」が目論見通りに機能していくのか、中学生たちが選択する「クラブ活動」に若干の危惧を抱きつつ見守っていききたい。

## 文化庁芸術祭が初の京都オープニング公演

25年4月13日から半年間の日程で大阪・関西万博が始まるが、万博を背景にした演劇界への積極的な動きが見えてこない。ただ、大阪府・市が共同で大阪文化の魅力を国内外に発信する「大阪国際文化芸術プロジェクト」の一環として

25年2月に大阪松竹座での「立春歌舞伎特別公演」実施を発表、また京都移転が2年目に入った文化庁の「文化庁芸術祭」のオープニング公演『伝統芸能で彩る京の風景』が10月1日、初めて京都（ロームシアター京都）で行われるなど、なんとなく「元気な大阪・関西」が感じられる。

そんな中、どういう風の吹き回しか、関西や九州の作家、編集者など16人が「なにげに文士劇」を立ち上げた。作家や編集者が演者を務める文士劇は1890年（明治23年）の尾崎紅葉らによる硯友社劇に始まり、戦後には文藝春秋社の肝入りで1977年まで東京で開かれ三島由紀夫や五木寛之ら人気作家が出演、毎回大きな話題を集めた。大阪では1950年代に関西の作家たちが「風流座」を結成。今回が同座最後の文士劇以来66年ぶりの復活という。参加作家たちの顔ぶれが凄い。芥川賞作家で文化功労者の高樹のぶ子（福岡市在住）、直木賞作家が今回の実行委員長を務めた黒川博行、門井慶喜、一穂ミチ、澤田瞳子、東山彰良（福岡・小郡市在住）、朝井まかて。中山義秀文学賞の蜂谷めぐ実、上田秀人、木下昌輝、船橋聖一文学賞が玉岡かおる。山本周五郎賞の湊かなえ。

旗揚げ公演は大阪市北区のサンケイホールブリーゼ（912席）を会場に11月16日、東野圭吾のミステリー小説「放課後」（村角太洋脚本・演出）を上演、セーラー服や学生服に身を包んだ作家たちの演技が満員の観客を楽しませた。

文士劇では戦後にスタート、唯一続いている（一時中断時期もあった）盛岡文士劇が24年も盛岡劇場（518席）で11月30日・12月1日の2日間、時代劇「平泉への道 藤原清衡物語〜中尊寺金色堂九百年」、現代劇「柱の傷は〜背っこくらべっこ」の2本立て上演で行われた。こちらでも岩手県ゆかりの直木賞作家高橋勝彦、芥川賞作家若竹千佐子、地元作家の南海遊、人気アナウンサーらが出演した。

6年目を迎えた「関西演劇祭2024」（板尾創路フェスティバル・ディレクター）が11月16～24日にCOOL JAPAN PARK OSAKA SSホールで10劇団・カンパニーが参加して開かれたが、24年も演劇祭が各地で開かれた。まず年々盛んになりつつある「豊岡演劇祭2024」。2020年にスタート、コロナ禍で中止になった21年を挟んで4回目の今回は例年より開催期間が1週

間長く、9月6日から23日までの18日間に拡大。会場エリアも豊岡市・養父市・香美町のほか新たに宝塚市・朝来町が加わっての開催になった。公式プログラム、公募のフリンジプログラム合わせて68団体が72のパフォーマンスを披露。来場者数は昨年の23,647人を1万人以上うわまわった36,226人という。平田オリザフェスティバル・ディレクターによると「全体の動員率が格段に上がり、満員のため当日の観客をお断りせざるを得ない公演もあった」。

この「豊岡演劇祭2024」と“演劇祭はしごバス”でつなぐバスの運行が行われた「鳥の演劇祭17」（中島諒人芸術監督）が9月14～29日、鳥取市鹿野町の鳥の劇場を中心に開かれた。韓国からの劇団ムッタ／バウンドレスリー・ソヨによる「涙の箱」、三島由紀夫作の「弱法師」卒塔婆小町」（いずれも中島諒人演出）などが上演された。国際演劇祭は4月27日～5月6日に「ふじのくにせいかい演劇祭2024」（宮城聡芸術総監督）がSPAC（静岡県舞台芸術センター）主催で静岡芸術劇場・舞台芸術公園を会場に開催。さらに利賀文化会議（鈴木忠志理事長）主催の「SCOTサマー・シーズン2024」が8月23日～9月8日、富山県南砺市利賀村の利賀山房・野外劇場など5会場を舞台に開かれた。期間中に鈴木忠志創出の「スズキ・トレーニング・メソッド」の講習会も行われたが、募集に世界26カ国、150人もの演劇人の申し込みがあったという。

## 大阪のシニア劇団がNYで英語ミュージカル

「全国シニア演劇大会 in OSAKA」が6月26～30日に大阪市北区の扇町ミュージアムキューブで開かれた。全国大会6回目の今回は地元大阪周辺の4劇団と東京や福岡、宮城など合わせて13団体が参加。最高齢95歳の出演者、ミュージカルあり、英語劇ありの多彩さで、ワークショップも開催した。シニア演劇では大阪市のシニアミュージカル発起塾（秋山シュン太郎塾長）が8月、初のニューヨーク公演を行った。同塾は作家・演出家の秋山が50～100歳を対象に1999年に創設、25年の歴史を積み重ねている。これまで英語劇クラスがハワイやタイ公演、2012年にはエジンバラ・フェスティバルのフリンジ公演なども行っている。ニューヨーク公演はバルーク大学内のローズ・ナイジェルパー



ク劇場で英語ミュージカル「花のクッキー売り娘」(秋山シュン太郎作・演出)を19人の渡米メンバーで上演してきた。同塾は大阪・京都・神戸・名古屋に稽古場を持ち、総塾生が約250人という大所帯。恐るべきパワーである。

### こびら歌舞伎の金丸座復活、内子座改修休館に

現存する日本最古の芝居小屋、香川県琴平町の金丸座(旧金毘羅大芝居、国の重要文化財)が耐震補強工事など大修理を終え24年4月、5年ぶりに「四国こびら歌舞伎大芝居」が復活した。一方、やはり国重要文化財の愛媛県内子町の芝居小屋・内子座が9月から保存修理工事のため4年間の休館に入った。

劇場関係では「SkyシアターMBS」が3月にJR大阪駅に隣接のJPタワー内にオープン。2016年に閉館した「シアターBRAVA!」を継承、演劇用ホールとして大阪最大規模の1300席。3月27～31日にこけら落とし公演として藤原竜也主演「中村仲蔵～歌舞伎王国下剋上異聞」(源孝志脚本、蓬萊竜太演出)で正式に開場した。続いてホリプロ製作のブロードウェイミュージカル「カム フロム アウェイ」、パルコプロデュース「リア王」などを上演、大阪の基幹劇場としてのお目見えを飾った。

中小の新劇場では大阪市港区海岸通りの大阪文化会館・天保山内に「TEMPO HARBOR THEATER」(442席)が2月29日オープン。名古屋市の繁華街・栄町の新中日ビル6階に「中日ホール」(594席)が3月29日にオープン。JR札幌駅と地下通路でつながった複合ビル2階に田中記念劇場財団(田中重明理事長)運営の民間劇場としてジョブキタ「北八劇場」(226席)が「あっちこっち佐藤さん」(芸術監督納谷真大・演出 5月11～6月9日)でオープン。小劇場ではあるが札幌発のロングラン公演を目指し、札幌初・全30ステージのこけら落とし公演が完売の好スタートとなった。また秋田県では秋田市内に芸術ホール「アートボックス卸町」(100席)が10月5日、鷹赤兒ソロ舞踏「Alter Ego」で始動。同ホールを運営するPALはAIR(アーティスト・イン・レジデンス)としての機能も持つ。

現在進行形のニュースでは22年から隈研吾設計で改修建て替え工事中の京都・宮川町の歌舞練場(東山女子学園所有)が25年11月にこけ

ら落とし公演を迎え、また劇団四季が名古屋駅前エリアにある「名古屋四季劇場」を2026年2月に終了、JR熱田駅前に新専用劇場(1300席)を26年夏にオープンする予定。

演劇専用劇場の少ない地方で閉館・廃止は大きな痛手だが、札幌大通公園の北海道新聞社8・9階にあった「道新ホール」(700席)が6月30日、61年の歴史に幕。1963年に開場、演劇人にとって同ホールで公演することがステータスの証明ともいわれた。もう一つは2012年にオープン、地域の貴重な演劇拠点になっていた愛媛県松山市の民間小劇場「シアターねこ」(100席)が8月31日閉館。いま建築費の高騰や人件費上昇などが理由で改築・建て替えをあきらめるケースもある。東京・三宅坂の国立劇場すら“野ざらし”になっている状況で、まして地方都市の場合は深刻だ。1968年に開場した岐阜県の大垣市民会館(1394席)は財政的な理由で代替施設のない状況で3月末に閉館した。さらに兵庫県の豊岡市民会館(1118席＝文化ホール)のケースは立案された建て替えが、当初の事業費が大幅に上昇したため(65億円が90億円)に断念、現在の会館を約50億円の事業費で改修することになった。いま地方都市の公共施設で建て替え時期の来ている施設が少なくない。この問題は今後も大きな課題になるであろう。

### 天野天街、山田昌、河東けい…演劇人の訃報相次ぐ

俳優、劇作家の訃報が相次いだ。名古屋を拠点とする劇団「少年王者館」を1982年に旗揚げ、劇作家・演出家として全国的に活動していた**天野天街**が7月9日に死去。まだ64歳の若さだった。また劇団未来(大阪市)の創立メンバーで座付き作家・**和田澄子**が6月5日、92歳でなくなった。俳優では劇団大阪(大阪市)の創立メンバーで中心的な俳優だった**清原正次**が2月12日がんのため81歳で死去。さらに名古屋を代表する**山田昌**が6月16日、肝細胞がんのため94歳で亡くなった。夫の天野鎮雄(2023年11月死去)と1985年に劇団「劇座」を立ち上げ、テレビドラマ・舞台「名古屋嫁入り物語」、NHK連続テレビ小説「おしん」、大河ドラマ「真田丸」などに出演した。関西の新劇界を代表する関西芸術座(大阪市)創立メンバーの**河東けい**が7月17日、

老衰のため98歳で亡くなった。1957年の劇団創設から参加、「奇蹟の人」のサリバン先生、一人語りの朗読劇「母」を代表作に持ち、NHK朝のテレビ小説や民放ドラマに幅広く活躍。沖縄芝居の歌劇ヒロインだった**伊良波冴子**は8月10日、老衰のため87歳で死去した。

2024年に俳優座が創立80周年記念公演、青年座、わらび座は70周年記念公演を迎えたが、地方劇団でも1945年創立で80年近い歴史を持つ劇団青春座(北九州市)、劇団からっかぜ(静岡・浜松市)は70周年を迎えた。ほかにも劇団未来(大阪市)・劇団支木(青森市)・劇団弘演(青森・弘前市)の60周年など苦闘の中にも演劇の灯を守り続けている。そうした地域劇団の活動の一端を一。

**【1月】**7～8日・**劇団120OEN**(福島市)がテルサホールFTホールで「鶴の羽衣」(清野和也脚本、佐藤隆太演出)を、25～28日・**AUBADE HALL Produce**(富山市)としてオーバード・ホール中劇場でタニノクロウ×オール富山3rd stage「ニューマドンナ」(タニノクロウ作・演出)上演。

**【2月】**10～11日・**劇団Kiss's**(札幌市)が生活支援型文化施設コンカリーニョで「精霊たちの祈り」(吉田裕美作・演出)。11～12日・**劇団支木**(青森市)がリンクモア平安閣市民ホールで創立60周年記念公演「イタリアからの贈り物～ジュセップ・ファブリーの面影」(田辺典忠作、森田誠演出)を。17日・**不思議少年**(熊本市)が熊本市男女共同参画センターはあもにい多目的ホールで「ハムレット」(シェークスピア作、大迫旭洋構成・演出)を、22～25日・**東温市民劇団**(愛媛・東温市)が東温アートヴィレッジセンター・アトリエNEST・Bで「夏の夜の夢」(シェークスピア作、斉藤おる演出)、23～25日・**大阪劇団協議会プロデュース公演**(劇団未来企画)が吹田メイシアターで「白き恋人たち」(南出謙吾作、しまよしみち演出)。

**【3月】**8～10日・**劇団ドラマシアターども**(北海道・江別市)がどもIVで「立冬のころ」(安念智康作、ども演出)、23～24日・**劇団仙台小劇場**(仙台市)が戦災復興記念館ホールで「東天を仰ぐ～平和を求める安達峰一郎」(石垣政裕作・演出)を。30～31日・**劇団ピーチロック**(沖縄・

名護市)が宜野座村文化センターがらまんホールで「鮫と狼」(新井章史作・演出)を。

**【4月】**27～28日・**劇団からっかぜ**(静岡・浜松市)が劇団アトリエで創立70周年記念公演「キニサクハナノナ」(小川未玲作、布施佑一郎演出)&「絵画のように、美しく」(高橋佑治作、布施演出)を。27～29日、5月3～5日・**演劇集団和歌山**(和歌山市)が和歌浦小劇場で「ちょうど時間となりました」(楠本幸男作、山入桂吾演出)。

**【5月】**3～5日・**劇団未来**(大阪市)が60年ぶりの東京公演として閉館の決まったこまばアゴラ劇場で「パレードを待ちながら」(J・マレル作、しまよしみち演出)、11～12日・**劇団演集**(名古屋市)が愛知芸文センター小ホールで「紙屋悦子の青春」(松田正隆作、土屋たかし演出)。

**【6月】**14～16日・**劇団大阪**(大阪市)が谷町劇場でwomen'sプロデュース公演として「貧乏物語」(井上ひさし作、熊本一演出)、23、29日・**劇団静芸**(静岡市)が静芸Studio2Fで「きらめく星屋～昭和オデオン堂物語～」(井上ひさし作、中川正臣演出)を。29日・**劇団名芸**(名古屋市)が太白文化小劇場で「オズの魔法使い」(ライマン・フランク・ボーム原作、栗木英章脚本、柘倫司演出)。29～30日・**劇団息吹**(東大阪市)が東大阪市イコーラムホールでおたのみ劇場「花がたな」(多田徹作、江上岳志演出)&「陳情・なにわ編」(ふじたあさや「陳情」より柏原舞童作、坂手日登美演出)を。30日・**劇団やまなみ**(山梨)が県立文学館講堂で「楽屋のハナ子さん」(石山浩一郎脚本、河野通方演出)。

**【7月】**13～14日・**劇団どろ**(神戸市)が新長田小劇場で「留守」(岸田國士作、合田幸平演出)、15日・**劇団マグダレーナ**(高松市)がサンポートホールでロックミュージカル「さぬき青春グラフィティ」(大西恵作・演出)、20日・**劇団吉祥じゅん&ワルキューレ**(大分市)がホルトホール大分大ホールで「北斎夢幻～百鬼箱を開けた絵師」(岩豪友樹子原作、吉祥じゅん脚本・演出)、27日～28日・**劇団大阪**(大阪市)が谷町劇場でUK企画2024「エダニク」(横山拓也作、上田啓輔演出)を。28日・**劇団すがお**(三重・桑名市)が桑名パブリックセンターで朗読劇「桑名の夏1945」(石垣まさし構成・演出)を。

**【8月】**23～25日・**劇団不労社**(京都市)が京

都芸術センターで「悪態Q」(西田悠哉・長洲大河脚本、西田演出)、24～25日・**福岡オトメ歌劇団**(福岡市)が甘菜館show劇場で「きつと大丈夫」&「最高の帽子ができるまで」(稲葉幸平脚本、中嶋正人演出)。24～25日・**劇団なすの**(栃木・那須塩原市)がGUNEI三島ホールで「那須野の大地」(広島友好作、鈴木龍男演出)。

**【9月】**13～16日・**幻灯劇場**(京都市)がTHEATRE E9 KYOTOで「フィストダイバー」(藤井颯太郎・演出)、20～22日・**演劇公社ライトマン**(札幌市)があけぼのA&Cセンターで「町は静か」(フレンチ作、GJ演出)、22～23日・**劇団石**(熊本市)が健軍文化ホールで「アルジャーノンに花束を」(D・キイス原作、菊池准脚本、堀田清演出)。

**【10月】**9～14日・**エーオーシー沖縄**(沖縄・那覇市)がひめゆりピースホールで「チムガナサン～不思議の島の空のその先」(扇田拓也脚本・演出)、13～14日・**演劇集団宇宙水槽**(鹿児島市)が中央公民館ホールで「四月馬鹿達の宴」(yn原作、宮田晃志脚本・演出)を。19～20日・**劇団はぐるま**(岐阜市)が岐阜市文化センター小ホールで「霜夜に紡ぐ～美濃国郡上凌霜隊ものがたり」(いずみ凜作、なみ悟朗演出)、26～27日、11月9～10日・**劇団からっかぜ**(静岡・浜松市)が劇団アトリエで創立70周年記念公演「切り子たちの秋」(ふたくちつよし作、布施佑一郎演出)。

**【11月】**7～10日・**ギンギラ太陽's**(福岡市)が西鉄ホールで「ひよ子侍と消えたアイスクリスタル姫」(大塚ムネト作・演出、かぶりモノ造型)、8～14日・**札幌座**(札幌市)が北八劇場で「民衆の敵」(イプセン作、斎藤歩脚本・演出)。9～10日・**劇団弘演**(青森・弘前市)が弘前文化センターで「父と暮らせば」(井上ひさし作、作間しのぶ演出)を。9～10日・**劇団海鳴り**(北海道・紋別市)が紋別市民会館大ホールで「蠅取り紙～山田家の5人兄妹」(飯島早苗・鈴木裕美作、我孫子正好演出)、15～16日・**劇団山形**(山形市)が山形市中央公民館ホールアズ七日町で「煙が目にしみる」(堤泰之作、平野礼子演出)。15～17日・**劇団大阪**(大阪市)が谷町劇場で「親の顔が見たい」(畑澤聖悟作、熊本一演出)、15～17日・**劇団名古屋**(名古屋市)が愛知県芸術劇場小ホールで「あ・り・が・と」(麻創けい子

作、谷川伸彦演出)を。23日・**劇団だいこん座**(山形・鶴岡市)が鶴岡市中央公民館で「雨のちくもり時々晴れ」(サトウマユミ作・演出)を。23～24日・**劇団青春座**(北九州市)が北九州芸術劇場中ホールで「西郷礼」(松本清張原作、柏田道夫作、馬淵理麻演出)、29～12月1日・**関西芸術座**(大阪市)がABCホールで「ムッシュ・フューグ～あるいは陸酔い」(リリアヌ・アトラン作、亀井賢二演出)。30日、**劇団コーロ**(大阪市)が宝塚ソリオホールで「眠っているウサギ」(くるみざわしん脚本、高橋正徳演出)を。

**【12月】**5～9日・**コトリ会議**(兵庫県)がAI・HALLで「おかえりなさせませんさい」(山本正典脚本、コトリ会議演出)、6～8日・**飛ぶ劇場**(北九州市)が北九州芸術劇場小劇場で「新生物」(泊篤志作・演出)を。6～8日・**浪花人情紙風船**(大阪市)が近鉄アート館で劇団解散さよなら公演「朝焼け旅立ち ヨヨイのヨイ！」(菱田信也作、三浪郁二演出)を、13～15日・**カラ／フル**(大阪府)がウイングフィールドで「熱帯夜」(深津篤史作、オダタクミ脚色・演出)。14～15日・**ゆざ演劇研究会**(山形・遊佐町)が生涯学習センターホールで「パートタイマー秋子」(永井愛作、本間知広演出)、22日・**劇団ショーマンシップ**(福岡市)が博多座で創作オペレッタ「やっぱり利兵衛～せいもん払いを始めた男八尋利兵衛伝」(生田晃二脚本、市岡洋演出)を上演。

もり・ようぞう

演劇ライター、評論研究。1941年大阪市生まれ。早大文学部国文科卒。1964～2006年、中日新聞・東京新聞(放送芸能部長、局長長職編集委員)勤務。文化庁芸術祭・芸術選奨審査委員、国立劇場歌舞伎公演専門委員等を歴任。日本演劇協会、芸能学会会員、松尾芸能賞選考委員

[関西の演劇]

## 2024年 活気に溢れ充実した舞台の上演が続く

宮辻政夫

## シテ方観世流と金剛流の両宗家が競演

〈能楽〉3月24日、京都・金剛能楽堂で同能楽堂開館20周年記念公演が開催され『泰山府君〈天女之舞〉』が上演された。その舞台上でシテ方観世流二十六世宗家、観世清和が天女を、シテ方金剛流二十六世宗家、金剛永謹が泰山府君を演じた。シテ方二流の宗家が同じ舞台上立つのは極めて異例。さらに金剛流の「雪の小面」を観世清和が、観世流の「小臈見」(赤鶴作)を金剛永謹が懸けて舞うというおそらくは前代未聞の舞台になった。

清和の天女は語を充分に聞かせたうえ、品格ある優美な舞を見せた。見所から「雪の小面」を見た印象は、奥深くに微かな笑みを蔵しているようで、それが舞台上に生きていた。清和の演技、舞がそう見せたとも言える。永謹の泰山府君は堂々たる佇まい。力を秘めた舞は見事であった。

『泰山府君』は昭和35年(1960)に金剛流で復活。前シテが天女、後シテが泰山府君で、一人で演じてきた。観世流では平成12年(2000)『泰山木』として復活。天女が後半も登場し、泰山府君と二人のシテが舞う。〈天女之舞〉は観世流の小書で、今回は観世流のやり方。

金剛龍謹の第12回龍門之會は12月12日、金剛能楽堂で開かれた。『弱法師〈盲目之舞〉』。出や歩みなどスキのない姿。小書〈盲目之舞〉はイロエの代わりに中ノ舞を舞う。清々しい舞であった。日想観の場面は張り詰めた気配の中、美を感じさせ、そこへ周りの雑踏という現実が割って入る。周りの混雑などの描写力もあった。

5月12日、金剛流で廃曲になっていた『恋松原』の復曲公演があった。若狭地方の悲恋伝説を基にした能。旅僧(ワキ、有松遼一)の前に男を待ちわびて死んだ女の霊(龍謹)が出現。僧の弔いで成仏するが、男の霊(永謹)も現れる。雪深い松原を舞台上に男女の情が描かれた。

第26回片山九郎右衛門後援会能は5月25日、

京都観世会館で開催された。九郎右衛門は『井筒』を舞った。前半、業平との思い出の世界をそこはかたなく描き出した。後半は格調ある舞。観世鏡之丞が仕舞『景清』を舞い、素晴らしい気迫。『船辨慶』はシテ、観世淳夫。前半、静の舞を見せ、後半は力強い知盛の亡霊であった。

春の茂山狂言会は「茂山七五三人間国宝認定記念」として3月20日、金剛能楽堂で開催された。七五三は『素襖落』の太郎冠者を勤め、酔いの芸を見せた。茂山あきらが好人物の叔父を演じ巧み。主人は茂山竜正。

## 大槻能楽堂創立90周年

大阪ではシテ方観世流、大槻文蔵の本拠地、大槻能楽堂が9月、90周年を迎えた。大槻能楽堂は昭和10年(1935)、文蔵の祖父・大槻十三が設立。それまで畳敷きだった観客席を能楽堂としては初めて椅子席にし、二階にレストランを設けるなど当時としては斬新だった。戦火を免れ終戦時には大阪市内で唯一の能楽堂であった。

昭和58年(1983)には木造から鉄筋コンクリート建てに改築。翌年4月から自主公演能をスタートさせた。誰もが安価で気軽に能を楽しめるように、という趣旨。現在まで50年以上も続き、上方の文化に貢献してきた。

大槻能楽堂では創立90周年記念公演が相次いだ。第1弾は1月3、4日に開催された『翁』。3日の翁は観世三郎太。シテ方観世流二十六世宗家、観世清和の嗣子。若年だが、鷹揚な舞ぶりは将来の大器を窺わせた。狂言『末広かり』の後、能『高砂〈八段之舞、流シ之伝、八頭之伝、大極之伝、禮脇〉』。今回は極めて珍しいものも含め小書五つを付けての上演。シテは観世清和。前シテ・尉の充実した謡、後シテ・住吉明神は力強く鋭い舞を見せた。

4日の『翁〈弓矢立合、三人之舞〉』は三人の翁が登場。中央に観世清和、下手に観世鏡之丞、上手に大槻文蔵の三人が並んだ光景は圧巻。さ

らに三番叟は野村万作、萬斎、裕基の三人が勤め、これまた豪華。『望月〈古式〉』のシテ・小澤刑部は観世銚之丞の重み、存在感が圧倒的である。シテツレ・安田莊司友治ノ妻は観世淳夫が好演。さらにワキ・望月の福王知登の謡、下人・野村裕基の反応鋭い詞など、緊迫感が溢れた。

2月の自主公演は『景清〈松門之出〉』(シテ、梅若猶義。梅若桜雪の代役)の後『木曾〈願書〉』。シテ・覚明の齋藤信隆が「三読物」の一つ「願書」を力強く、ノリもよく語った。後半は長袴姿で男舞を颯爽と舞ってみせた。3月は『草紙洗小町〈替装束〉』。シテ・小野小町を赤松禎友が演じ、これも見事な長袴の舞を見せた。ワキ・大伴黒主の宝生欣哉が上々。この後、大槻文藏と大槻裕一の『石橋〈師資十二段之式〉』。この小書では親獅子が子獅子を谷へ蹴落とす所作を見せ、文藏の厳しい教育が舞台上で再現されたようでもあった。

創立90周年を祝う記念公演は続き、9月は狂言『萩大名』(シテ、茂山七五三)と能『大原御幸』(シテ、観世清和)。建礼門院に扮した清和の謡が聞き応え充分であった。10月は狂言『粟田口』(シテ、野村万作)と能『屋島〈弓流、奈須與市語、語掛〉』(シテ、大槻文藏)。今回も文藏の名舞台上に充分堪能させられた。さらに野村萬斎の「奈須與市語」が素晴らしい緊迫感と劇的な語りで圧倒的であった。11月は『井筒』(シテ、友枝昭世)。豪華公演が続き、満員の盛況が続いた。

令和5年(2023)から始まった「大槻文藏と読み解く能の世界」は好評で令和6年も開催。

7月恒例のナイトシアターは『谷行』(シテ、梅若紀彰・梅若猶義)。ワキは福王知登。峯入修業で病になった松若を掟に従って谷へ落さねばならない——知登が露ではなく師の阿闍梨の苦悩を表現した。この公演では金峯山寺山伏衆による御法楽の演奏、さらに総本山金峯山寺管領・金峯山修験本宗館長の五条良知と大槻文藏が「山岳信仰と能」と題して対談。山伏の修業の話や大峯山に能と同じ「谷行」の話があったことなどが紹介された。

大槻文藏・裕一の会は6月1日に開催。裕一の「咲くよこの花賞」「大阪文化祭奨励賞」受賞記念である。『養老〈水波之伝〉』ではシテの裕一が気迫ある舞を見せた。狂言『蝸牛』(シテ、野村

萬斎)の後、『葵上』(シテ・大槻文藏)。今回は古演出により、青女房が三人出演した。文藏扮する六條御息所の生霊が小袖(つまり葵上)を見る鋭さ。文藏ならではの鬼気迫る舞台であった。

大槻能楽堂ではインバウンドを対象にした「OSAKA NOH FESTA」(大阪能フェスタ in 上町)を10月16日に開催。『翁』(観世清和)の後、狂言『蟹山伏』(シテ、善竹隆平)と『羽衣〈和合之舞〉』(シテ、大槻文藏)。客席には外国人もかなり見受けられた。

### 初代萬壽・六代目時藏襲名披露

〈歌舞伎〉関西・歌舞伎を愛する会結成四十五周年記念 七月大歌舞伎が大坂松竹座で開催され、初代萬壽・六代目時藏が襲名披露。さらに時藏の長男大晴が五代目梅枝を襲名し、初舞台を踏んだ。初代萬壽の披露狂言は『恋女房染分手綱』。乳人重の井は初代萬壽。自然薯の三吉実は与之助は梅枝。六代目時藏襲名披露狂言は『姫山姥』。時藏の八重桐。古風な面差しが生き台詞も上々。夫の坂田藏人時行(菊之助)の魂が宿った八重桐は石の手水鉢を投げるなど、堂々たる立回り。新時藏を印象付けた。

### 仁左衛門が独自の工夫も入れた上方型の権太好演

『義経千本桜』は「木の実」「小金吾討死」「すし屋」。仁左衛門の権太である。河内屋の型、文楽の型を踏襲しつつ、独自の工夫を取り入れた権太である。その最も大きな特長は、維盛の正室・若葉内侍と若君・六代君の身代わりにして梶原方に差し出した女房小せんと善太への情愛の深い表現である。今回も感動的な権太であった。

1月は大阪松竹座の正月恒例となった「坂東玉三郎 初春お年玉公演」が3～14日、開催された。口上の後、地唄舞『黒髪』。激しい恋心を内に持った女の姿を描き出した。『「天守物語」より』は玉三郎が富姫と亀姫に扮してみせた。最後は地唄舞『由縁の月』。

2月は立春歌舞伎が開催された。大阪の文化芸術を国内外からの来阪者に楽しんでもらおうと大阪府・市が連携した「大阪国際文化芸術プロジェクト」の一環。

昼の部は『源平布引滝』義賢最期」竹生島遊

覧「実盛物語」。義賢と実盛は愛之助。全く別の主役二役を一人が続けて演じるのは珍しい。愛之助は、義賢では身重の妻、葵御前と娘の待宵姫への情愛を表現。戸板倒しの立ち廻り、三段上から仏倒れの壮絶な最期と存分に見せた。実盛では終盤、馬に乗って武将の鷹揚さなど楽しく見せた。実盛の物語部分と重複するとして歌舞伎では上演されない「竹生島遊覧」を出したのは珍しい。

夜の部は『新版色讀販(ちよいのせ)』から。これはかつて二代目鴈治郎の番頭善六が絶妙なケツサクであった。今回は四代目鴈治郎の善六。お染(尾上右近)に押し付けた恋文が捨てられ、それを手に入れた山家屋清兵衛(愛之助)が皆の前で読み上げる——。鴈治郎は抑えた演技方。扇雀・虎之介父子の『連獅子』の後、『曾根崎心中』。壱太郎のお初、尾上右近の徳兵衛。天神森の場でお初と徳兵衛がイキの合った演技。二人の恋を美しく見せた。特に壱太郎ならではのお初を創り上げたと言える。

大阪松竹座の6月はスーパー歌舞伎『ヤマトタケル』。團子2回目のヤマトタケルである。ヤマトタケルが傷付いてからの演技は悲壮感が漂い充分に見せた。

大阪松竹座の10月は十三代目市川團十郎白猿襲名披露と八代目市川新之助初舞台の十月大歌舞伎。昼の部は『雷神不動北山櫻』の通し。團十郎白猿は早雲王子、安倍清行、兼寺彈正、鳴神上人、不動明王の五役を演じた。兼寺、鳴神上人は手に入った役。兼寺では颯爽とした風格を見せ、鳴神上人は荒れなど力強い。雲絶間姫は雀右衛門。不動明王はスモークの中、空中浮揚を見せた。夜の部は『義経千本桜』『鳥居前』から。右團次の佐藤忠信実は源九郎狐。『一條大藏卿』は幸四郎の大藏卿。『連獅子』は、團十郎白猿と新之助が力強い毛振りを見せた。令和4年11月、歌舞伎座から始まった襲名披露はこの大阪松竹座公演でめでたく掉尾を飾った。5月、道頓堀川の船上で十三代目が「にらみ」をする行事もあった。

### 松竹創業130周年記念の顔見世

京都・南座の顔見世は松竹創業130周年記念である。昼の部は新作『蝶々夫人』(石川耕土脚本・演出)から。同題のオペラの作曲者、プッ

チーニの没後百年に合わせた企画。壱太郎の蝶々夫人。蝶々夫人が命を絶つ「道行の場」は竹本を使った。『三人吉三巴白波』は大川端の場。お嬢吉三(孝太郎)、お坊吉三(隼人)、和尚吉三(錦之助)。『大津絵道成寺』は壱太郎(愛之助の代役)。大津絵の登場人物五役を早変わりですり分けた。藤娘、鷹匠、座頭、船頭、鬼である。『ぢいさんばあさん』は中車の伊織、扇雀の妻るん。

夜の部は『元禄忠臣蔵』『仙石屋敷』から。仁左衛門の内蔵助、梅玉の仙石伯耆守。内蔵助が大目付の伯耆守に対し、吉良邸へ討ち入った赤穂浪人の思いを、情理を尽くして諄々と説いていく。仁左衛門の台詞が王倒的であった。主税の鷹之資が好演。『色彩間苺豆』は萬壽のかさね、萬太郎(愛之助の代役)の百姓と右衛門実は久保田金五郎。大筋は梅幸型で演じる。六代目型も入っている。現行一般的なやり方である。『御所五郎蔵』は仁左衛門監修。隼人の五郎蔵、壱太郎の皐月、巳之助の土右衛門、吉太郎の逢州。『越後獅子』は鴈治郎、萬太郎、鷹之資ら。

### 壱太郎が3役好演

南座を見てゆくと三月花形歌舞伎は松プログラムと桜プログラム。松プロは『心中天網島』『河庄』(中村鴈治郎指導)と『忍夜恋曲者』(「将門」)、桜プロは『女殺油地獄』(片岡仁左衛門指導)と『忍夜恋曲者』。

「河庄」は尾上右近の治兵衛、壱太郎の小春。右近がなかなかの和事ぶり。足を割る時、柔らかい動きをした。こんな足の割り方は初めて見た。「足を割るのは和事ではない」という意見を考慮に入れた演出かもしれないが、成駒家型としてはきっぱり足を割るべきだと思う。小春の壱太郎が充分。本役である。孫右衛門は隼人。

『女殺油地獄』は隼人の与兵衛。金策を断られて豊島屋女房のお吉(壱太郎)を殺してしまう。油塗れの殺し場など熱演。『将門』は滝夜又姫の壱太郎が好演。光圀は松プロでは隼人、桜プロは右近。

5月11～19日は歌舞伎鑑賞教室。『京人形』で左甚五郎(松十郎)が自ら作った京人形に精(吉太郎)が宿る。吉太郎がしっかりした踊りを見せた。女房は千壽。

6月は坂東玉三郎特別公演。口上の後、玉三

郎5年ぶりの『阿古屋』。役者ぶりの大きさは言うまでもなく、三曲ともますます芸の充実ぶりを感じさせた。

九月花形歌舞伎は『あらしのよるに』(きむらゆういち原作、今井豊茂脚本、藤間勘十郎演出・振付)。狼のがぶ(獅童)と山羊のめい(壱太郎)の友情物語。すでに人気が定着している作品。

### 今年も永楽館歌舞伎盛況

愛之助が座頭を勤める第14回永楽館歌舞伎が11月、兵庫県豊岡市で開催された。『奥州安達原』「袖萩祭文」は愛之助の桂中納言教氏実は安倍貞任。前半、愛之助は教氏として登場。公卿の品格を表現し、後半は貞任の正体を現わし、義太夫狂言時代物の力強さ、勇壮さを表現。前後半を演じ分けた。澤瀉屋型で演じた。妻袖萩の壱太郎が好演。八幡太郎義家は孝太郎。

例年、人気のある口上の後、『高環』。次郎冠者の愛之助が高下駄を履いて鮮やかなタップダンスを披露した。

関西の門閥外の役者による「第9回あべの歌舞伎 晴の会」は8月1～4日、大阪・近鉄アート館で開催された。今年は『伊賀越道中双六』(亀屋東齋改訂)。和田行家殺し、円覚寺、沼津、鍵屋の辻の仇討、という構成。股五郎・十兵衛(松十郎)、お米(千壽)、政右衛門・平作(千次郎)。片岡仁左衛門指導・監修。山村友五郎演出。

### 国立文楽劇場開場40周年

〈文楽〉国立文楽劇場開場40周年記念公演が年間通して開催された。1月、初春文楽公演は第1部『七福神宝の入船』から。『近頃河原の達引』は勘十郎の与次郎。第2部は『伽羅先代萩』。政岡忠義の段は呂勢太夫、清治。呂勢太夫が乳母政岡(和生)の気概、わが子千松(勘次郎)を八汐(玉志)に殺されても悲しみに耐える姿などを十分に語った。第3部は『平家女護島』(織太夫、燕三)。俊寛は玉男。

### 「豊竹若太夫」の大名跡が57年ぶりに復活

4月文楽公演第2部は豊竹呂太夫改め11代目豊竹若太夫襲名披露。初代豊竹若太夫(後の越前少掾)は竹本義太夫の弟子で1703年(元禄16)、大坂・道頓堀に豊竹座を旗揚げ、竹本座と

競い合った。豊竹姓の祖である。襲名披露狂言は『和田合戦女舞鶴』「市若初陣」。元文元年(1736)、初代若太夫が初演し、10代目若太夫が昭和25年(1950)、襲名披露狂言に選んだ由縁の作品。10代目は感情を極限まで高めてぶつける語り方で「命を削る浄瑠璃」と呼ばれ凄まじい迫力があつた。当代はその孫。

7～8月の夏休み文楽特別公演。第2部は『生写朝顔話』。「笑い葉」は織太夫、藤蔵。萩の祐仙を勘十郎が面白く巧みに遣った。「宿屋」は鍛太夫、清允。和生の朝顔、玉男の駒沢次郎左衛門。

文楽11月公演は『仮名手本忠臣蔵』通し。この公演は昼夜2部制に復帰の第1回。第1部は大序から四段目まで。第2部は「五段目」から「七段目」まで。「八、九段目」は翌令和7年1月公演で上演、という変則的な番組となった。四段目切は若太夫、清介。塩判判官は和生。第2部「六段目」は勘十郎の勘平。「七段目」は千歳太夫(由良助)、平右衛門(織太夫)、おかる(呂勢太夫)ら。千歳太夫の語りに「酔い」がない。織太夫は力溢れる語り。呂勢太夫のお染は気持ちの表現、高音と見事な語り。呂勢太夫は1部では三段目「殿中刃傷」を語り、師直の太く低い声を力強く出して語っていた。おかると師直という、全く質の違う声を昼夜で語り分けていた。由良助は玉男。風格があつた。

「中之島文楽2024」が10月25、26日、大阪市中央公会堂で開催された。文楽と浪曲で「日本の四季」をテーマに4作品を上演。第1部は浪曲の新作『夏祭浪花鑑』(真山隼人)と文楽『関寺小町』(藤太夫、燕三、玉佳ら)。第2部は『伊達娘恋緋鹿子』「火の見櫓」(織太夫、燕三、紋秀ら)と「道行初音旅」(藤太夫、燕三、玉男ら)。2年前から背景にプロジェクション・マッピングを採用しており、今回は京都在住の気鋭の画家、谷原菜摘子の絵が大きく映し出された。妖しく、美しい谷原の絵が文楽の物語に新たな光を当てた。大阪市と文楽協会が構成する古典芸能振興事業実行委員会主催。

### 新劇場「SkyシアターMBS」がオープン

〈現代演劇〉大阪駅西口直結「J Pタワー大阪」が完成、その中の商業施設「K I T T E大阪」の最上階6階に新劇場「S k yシアターM B S」が3

月27日、『中村仲蔵——歌舞伎王国 下剋上異聞』(源孝志脚本、蓬萊竜太演出)公演でオープンした。劇場はプロセニウム形式で1289席(オペ使用時は1197席)。運営主体はMBSメディアホールディングスとMBSライブエンターテインメント。

『中村仲蔵』は江戸時代中期、門閥外の役者から大立者に出世した初代仲蔵(藤原竜也)の物語。破天荒な仲蔵を生々しく藤原が熟演した。オープニングシリーズとしては2025年5月の劇団☆新感線公演まで計19公演。これ以外にも多彩な公演が続いた。

### 松竹新喜劇は「喜劇発祥120年」公演

松竹新喜劇は1月、南座で新春お年玉公演。Aプロ『小判掘出し譚』(茂林寺文福・館直志作、村角太洋脚色・演出)、Bプロ『蕾』(わかぎゑふ作・演出)。後者はお見合いを題材にした喜劇。5月は大阪松竹座で「喜劇発祥120年」公演。『幸助餅』(一堺漁人作、齋藤雅文演出)と『村は祭りで大騒ぎ』(文福・直志作、堤泰之演出)。後者には歌手、川中美幸がゲスト出演して場内を沸かせた。11月、大阪松竹座公演では『砂糖壺』(文福・直志作、わかぎ演出)と『人生双六』(同、曾我廼家八十吉演出)。『人生双六』は、路頭に迷う宇田信吉(曾我廼家一蝶)と失業中の浜本啓一(藤山扇治郎)が、成功を目指して5年後に再会を約す——。松竹新喜劇の代表的名作に若手が挑戦した。

10月・南座は錦秋喜劇特別公演『太夫さん』(北條秀司作、大場正昭演出)。藤山直美が一度は男に騙されるが、後に幸せになる喜美太夫を演じた。

「KYOTO EXPERIMENT 2024 京都国際舞台芸術祭」が10月、京都市内で開催された。身体と社会の関係性を浮かび上がらせるムラティ・スルヨダルモの『スウィート・ドリームス・スウィート』など多彩な作品が上演された。

### 関西俳優協議会新人賞など決定

関西俳優協議会は2024年度最優秀新人賞を決定。『流れ星』の一平役など枯木隆志(劇団五期会)、『その受話器はロバの耳』の藤原眞美役、中村恵美子(大阪放送劇団)、『ムッシュ・フューグ』ライサ役の村尾保乃花(関西芸術座)。

同協議会公演『姥ざかり』が2月、吹田メイシアターで開催。盛況だった。

第52回大阪劇団協議会フェスティバルが9月から翌年1月まで10劇団が参加して開催された。

兵庫県立ピッコロ劇団は9月、ピッコロシアターで第8回「近松賞」受賞作『宇宙に缶詰』(肥田知浩作、さりngROCK演出)を上演。孫高宏らが出演した。

南河内万歳一座は6月、一心寺シアター倶楽で『新・あらし』(内藤裕敬作・演出)を上演。2010年以降計3回、外部で上演してきた作品を改訂、劇団での初上演となった。内藤作品の手応えを感じさせた。

### 宝塚バウホールで意欲作相次ぐ

〈宝塚歌劇〉宝塚バウホールでは意欲作、佳作の上演が相次ぎ、見応えがあった。1、2月は月組『Golden Dead Schiele』(熊倉飛鳥作・演出。彩海せら主演)。画家、エゴン・シーレの世界を描いた。4、5月はヒッチコック映画の原作『39Steps』(田渕大輔脚本・演出)。この雪組公演に主演した専科の風七瑠海は2025年1月19日付で退団。8、9月は月組『BLUFF』(正塚晴彦作・演出、風間柚乃主演)。10月は宙組『MY BLUE HEAVEN——わたしのあおぞら』(齋藤吉正作・演出、風色日向主演)。

### 翼和希がOSKトップに

〈OSK〉OSK日本歌劇団は4月、大阪松竹座で『春のおどり』、7月、南座で『レビュー in Kyoto』を上演。南座の公演でトップの楊琳が引退。9月、翼和希が新トップに就任した。11月、COOL JAPAN OSAKA TTホールでトップ就任記念公演『Road to 2025!!』が開催され盛況だった。

### みやつじ・まさお

演劇評論家。元毎日新聞大阪本社芸部専門編集委員。著書に「花のひと——孝夫から仁左衛門へ」「人形有情——吉田玉男文楽芸談聞き書き」「狂言兄弟——千作と千之丞の八十七年」「無辺光——片山幽雪聞書」など。



## [テレビ・ドラマ]

## 2024年のテレビドラマ ～秀作多く単発ドラマも話題作の多い1年

中町綾子

ここ数年のなかでも秀作ドラマの多い1年だった。連続ドラマでは、オリジナル脚本の企画力・構成力に目を見張った。小説や漫画の原作がないことでテレビドラマならではの表現の開拓があったとも言える。これまでのジャンルにとらわれない作品も放送された。3クール続けて宮藤官九郎が脚本を手掛ける連続ドラマ『不適切にもほどがある!』、『季節のない街』、『新宿野戦病院』が放送され、単発のスペシャルドラマ『終わりに見た街』も目をひいた。そのほかの単発ドラマもバカリズム、北川悦吏子、安達奈緒子、森下佳子ほかの脚本家や実力派の監督が手掛ける注目作が多かった。

## ●連続ドラマの注目作

1月期では、**金曜ドラマ『不適切にもほどがある!』**(TBSテレビ、TBSスパークル、1月26日～3月29日、全10話)が大きな話題を呼んだ。1986年、高校で体育教師をする小川市郎(阿部サダヲ)が、学校帰りの路線バスに乗ったことから38年後の2024年にタイムスリップする。昭和時代から令和の時代にやってきた彼の言動はコンプライアンス的に「不適切」なものばかり。そこに相容れない文化(時代・風潮)の違いが浮かびあがる。いきすぎた風潮への変化を、ミュージカル仕立てでコミカルに問いかけた。タイトルは「ふてほど」と略されて流行語となった。(出演＝仲里依紗、磯村勇斗、河合優実ほか、脚本＝宮藤官九郎、演出＝金子文紀ほか、主題歌＝Creepy Nuts「二度寝」、第61回ギャラクシー賞テレビ部門 特別賞、第50回放送文化基金賞ドラマ部門 奨励賞、演技賞、第40回ATP賞テレビグランプリドラマ部門 グランプリ、東京ドラマアウォード2024 連続ドラマ部門優秀賞、脚本賞、演出賞、主題歌賞、2024ユーキャン新語・流行語大賞年間大賞(「ふてほど」))

**火曜ドラマ『Eye Love You』**(TBSテレビ、1月23日～3月26日、全10話)は、オリジナル脚本のファンタジーラブストーリーで、主演俳優

(チェ・ジョンヒョプ)のピュアでストレートな愛情表現が視聴者をひきつけた。侑里(二階堂ふみ)は、目を合わせた人の心の声が聞こえる特殊能力“テレパス”を持つ。知りたくない他人の本音に傷つくこともあった。そんな彼女が韓国からの留学生でフードデリバリーのアルバイトをするテオ(チェ・ジョンヒョプ)と出会い恋が生まれる。日韓俳優のラブストーリーは連続ドラマでは本作が初めて。(脚本＝三浦希紗、山下すばる、演出＝岡本伸吾、福田亮介、加藤亜季子、プロデューサー＝中島啓介、車賢智、佐井大紀)

**プレミアムドラマ『舟を編む～私、辞書つくります～』**(NHK、AX-ON、2月18日～4月21日、全10話)は、ファッション誌の廃刊で辞書編集部に移動になった岸辺みどり(池田エライザ)が、“くせ者ぞろい”の部員たちに翻弄されながらも辞書編さんの仕事にのめり込んでいく姿を描く。原作から主人公を改変し、言葉の映像化など映像化にあたって新鮮な魅力を放った。(原作＝三浦しをん、脚本＝蛭田直美ほか、演出＝塚本連平、麻生学、安食大輔、制作統括＝高明希、遠藤理史、訓覇圭、ギャラクシー賞 第62回上期入賞、東京ドラマアウォード 2024 連続ドラマ部門優秀賞、第40回ATP賞 奨励賞)

NHK、NHKBSプレミアム4Kの**土曜ドラマ枠**は全4話の秀作が続いた。終末期病棟を描いた『お別れホスピタル』(2月3日～2月24日、主演＝岸井ゆきの、原作＝沖田×華、脚本＝安達奈緒子、演出＝柴田岳志、笠浦友愛、制作統括＝小松昌代、松川博敬)。『パーセント』(5月11日～6月1日)は、ローカルテレビ局のプロデューサー(伊藤万里華)が「障害のある俳優を起用するドラマ企画」をすすめることになり、俳優を目指す車椅子の女子高生(和合由依)と出会う。ドラマづくりに取り組む葛藤と奮闘を描いた。和合は本作がドラマ初出演作。(作＝大池容子、演出＝大嶋慧介、押田友太、制作統括＝櫻井賢、安達もじり、プロデューサー＝南野彩子、葛西勇

也、ギャラクシー賞5月度月間賞)

4月スタートの連続ドラマでは、記憶喪失をモチーフとするドラマが複数放送されて話題を呼んだ。なかでも『**アンメット ある脳外科医の日記**』(関西テレビ、MMJ、4月15日～6月24日、全11話)は、青春群像としても見ごたえがあった。脳外科医のミヤビ(杉咲花)は将来を嘱望されていたが不慮の事故で記憶障害の後遺症を患う。過去2年間の記憶が無く、今日の出来事を翌日には全て忘れてしまう。そんななかで信じられるものは何かを問い、有能な同僚医師である三瓶(若葉竜也)との関係を築いていく。彼女に想いを寄せる綾野(岡山天音)など若者たちの心の通い合いを瑞々しく映し出した。(出演＝生田絵梨花、井浦新、千葉雄大ほか、原作＝〈原作〉子鹿ゆずる、〈漫画〉大槻閑人、脚本＝篠崎絵里子、演出＝Yuki Saito、本橋圭太、日高貴士、プロデューサー＝米田孝、本郷達也、主題歌＝あいみょん「会いに行くのに」、東京ドラマアウォード 2024 連続ドラマ部門優秀賞、助演男優賞(若葉竜也)、ギャラクシー賞6月度月間賞、MIPCOM Buyers' Award for Japanese Drama 優秀賞)

**火曜ドラマ『くるり～誰が私と恋をした?』**(TBSテレビ、大映テレビ、4月9日～6月18日、全11話)は、目立つことを恐れてすごしてきたまこと(生見愛瑠)が事故で記憶を失ったことから、本当の自分を探しはじめる。彼女の前に現れた3人の男性との四角関係や記憶喪失の原因などをめぐるストーリーでラブコメミステリーと銘打って放送された。(出演＝瀬戸康史、神尾楓珠、宮世琉弥、脚本＝吉澤智子、演出＝松木彩、大内舞子、プロデューサー＝八木亜未、主題歌＝Da-iCE「I Wonder」)

**ドラマ10『燕は戻ってこない』**(NHK、4月30日～7月2日、全10話)吉川英治文学賞・毎日芸術賞をW受賞した桐野夏生作品をドラマ化。派遣社員のリキ(石橋静)は高額の謝礼で代理出産を持ちかけられる。女性の貧困、生きづらさ、代理出産などの社会的なテーマを描いた。(出演＝内田有紀、稲垣吾郎、脚本＝長田育恵、演出＝田中健二、山戸結希、北野隆、制作統括＝清水拓哉、磯智明、プロデューサー＝板垣麻衣子、大越大士、東京ドラマアウォード 2024 連続ドラマ部門優秀賞、主演女優賞(石橋静

香)、助演女優賞(内田有紀)、ギャラクシー賞7月度月間賞)

**ドラマ25『季節のない街』**(テレビ東京、4月6日～6月8日、全10話)宮藤官九郎が企画、監督、脚本を手掛けた。12年前の“ナニ”で被災した人々が身を寄せる仮設住宅にやってきた半助(池松壮亮)の目を通して、個性にとんだ住人達の悲喜が描かれた。(出演＝仲野太賀、渡辺大知、三浦透子、濱田岳、監督＝横浜聡子、渡辺直樹、音楽＝大友良友、撮影監督＝近藤龍人、チーフプロデューサー＝濱谷晃一、プロデューサー＝山本晃久、長坂まき子、半田健、共同プロデューサー＝大越大士、制作プロダクション＝オフィスアッシュ)

4月スタートのほかの話題作には以下のドラマがある。**テレビ朝日開局65周年記念木曜ドラマ『Believe—君にかける橋—』**(テレビ朝日、4月25日～全9話、出演＝木村拓哉、竹内涼真、山本舞香、天海祐希、脚本＝井上由美子、監督＝常廣丈太、樹下直美、エグゼクティブプロデューサー＝三輪祐見子、プロデューサー＝都築歩、高木萌実、松野千鶴子、制作協力＝アズバーズ)。

**夜ドラ『VRおじさんの初恋』**(NHK、4月1日～5月23日、全32話、出演＝野間口徹、倉沢杏菜、井桁弘恵ほか、脚本＝森野マッシュ、演出＝吉田照幸、桑野智宏、石川慎一郎、中村俊介、制作統括＝桑野智宏、プロデューサー＝大久保篤、船田遼介、ギャラクシー賞6月度月間賞)。

7月も宮藤官九郎が脚本を手掛けるドラマが放送された。新宿歌舞伎町の片隅にある病院を舞台にした『**新宿野戦病院**』(フジテレビ、7月3日～9月11日、全11話)だ。小池栄子と仲野太賀がダブル主演し、小池は、岡山弁と英語交じりで話す米国籍の元軍医を熱演した。(出演＝橋本愛、平岩紙、岡部たかし、脚本＝宮藤官九郎、演出＝河毛俊作、澤田謙作、清矢明子、プロデューサー＝野田悠介、ギャラクシー賞7月度月間賞)

ほかに話題となった『**海のはじまり**』(フジテレビ、7月1日～9月23日、全13話)は、MIPCOM Buyers' Award for Japanese Dramaでグランプリを受賞した。(出演者＝目黒蓮、有村架純、泉谷星奈、木戸大聖、古川琴音、池松壮亮、大竹しのぶほか、脚本＝生方美久、演出＝風

間太樹、高野舞、ジョン・ウンヒ、プロデューサー＝村瀬健、制作プロデューサー＝唯野友歩、制作協力＝AOI Pro.)

7月のほかの作品には、**日曜劇場『ブラックペアン シーズン2』**(TBSテレビ、7月7日～9月15日、全10話、原作＝海堂尊、脚本＝槌谷健、守口悠介ほか、演出＝西浦正記、加藤亜季子、伊東祥宏、プロデューサー＝伊與田英徳、武藤淳、佐久間晃嗣)、**『クラスメイトの女子、全員好きでした。』**(読売テレビ、7月11日～9月12日、全10話、出演＝木村昴、新川優愛、前原滉、結城モエ、ほか、原作＝爪切男、脚本＝森ハヤシ、鈴木裕那、武田雄樹、演出＝綾部真弥、田口桂、松丸博孝、プロデューサー＝矢部誠人、黒沢淳、東田陽介、チーフプロデューサー＝前西和成、制作協力＝テレパック)がある。また、7月には昨年BSプレミアムで放送された**『家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった』**が地上波のNHKドラマ10枠で放送(7月9日～9月24日、全10話、本放送より5分短い45分の短縮版)され再評価された。(作品内容については『演劇年鑑2024』に記載している。)

9月放送スタートのドラマでは、**プレミアムドラマ『団地のふたり』**(NHK、テレパック、9月1日～11月3日、全10話)が注目された。55歳の幼なじみで、ともに独身、団地の実家暮らしの奈津子と野枝(小林聡美、小泉今日子)の日々を描いた。“毎日を当たり前前に生きている”姿を小林、小泉が憧れの生き方のような、それでいて十分に共感を誘う演技でみせた。(原作＝藤野千夜、脚本＝吉田紀子、演出＝松本佳奈、金澤友也、制作統括＝八木康夫、勝田夏子、ギャラクシー賞10月度月間賞)

10月期は話題作が並んだ。**ドラマ10『宙わたる教室』**(NHK、ランプ、NHKエンタープライズ、10月8日～12月10日、全10話)は、研究室を離れ定時制高校に理科教師として着信した藤竹(窪田正孝)が生徒たちに声をかけ科学部を創部するところから始まる。科学部には年齢も環境も違う4人が集まる。次第に実験に夢中になる生徒たちは、希望とあきらめの間で揺れ動く。誰よりも熱心になった柳田(小林虎之介)の諦観の中に一縷の光をつかもうとする姿が胸をうつ。原作は第70回青少年読書感想文全国コンクール高等学校の部課題図書。(原作＝伊与原

新、脚本＝澤井香織、演出＝吉川久岳、一色隆司、山下和徳、制作統括＝橋立聖史、神林伸太郎、渡辺悟、エンディング曲＝「Break out of your bubble」 Little Glee Monster、ギャラクシー賞12月度月間賞)

**金曜ドラマ『ライオンの隠れ家』**(TBSテレビ、TBSスパークル、10月11日～12月20日、全11話)は、家族として暮らす難しさとおたたかさを描いた。自閉スペクトラム症で絵が得意な美路人(坂東龍汰)と市役所職員の兄・洗人(柳楽優弥)の前に、ある日謎の少年・ライオン(佐藤大空)が現れる。少年はなぜ彼らのところにやってきたのかをサスペンスで見せ、それぞれに成長する姿を演じた。繊細な心情を表現した出演者たちの演技が光った。(企画＝吉藤芽衣、中野翔貴、脚本＝徳尾浩司、一戸慶乃、演出＝坪井敏雄、青山貴洋、泉正英、プロデューサー＝佐藤敦司、制作プロデューサー＝松本友香、ギャラクシー賞12月度月間賞)

**土曜ドラマ『3000万』**(NHK、10月5日～11月23日)コールセンターで働く派遣社員の祐子(安達祐実)が特殊詐欺の犯罪にひき込まれていく過程をスリリングな展開でみせた。折しも現実のニュースで特殊詐欺事件が伝えられる真ただ中での放送だった。取材力・構成員の高い脚本と緊張感溢れる演出で社会の一側面を描いた。NHKが立ち上げた脚本開発チームのメンバー4人が脚本を手掛けた。(出演＝青木崇高、味元耀大、野添義弘、森田想ほか、脚本＝弥重早希子、名嘉友美、山口智之、松井周、演出＝保坂慶太、小林直毅、制作統括＝渡辺哲也、ギャラクシー賞11月度月間賞)

そのほかの10月期の連続ドラマの注目作には、1950年代から70年代の炭鉱の島・長崎県・端島の人々の生活の息吹を感じさせた**日曜劇場『海に眠るダイヤモンド』**(TBSテレビ、TBSスパークル、10月20日～12月22日、全10話)がある。(出演＝神木隆之介、宮本信子、杉咲花、池田エライザ、清水尋也、土屋太鳳、國村隼、斎藤工、沢村一樹ほか、脚本＝野木亜紀子、演出＝塚原あゆ子、福田亮介ほか、企画＝中井芳彦、後藤大希、プロデューサー＝新井順子、松本明子、制作協力＝NBC長崎放送、ギャラクシー賞12月度月間賞)

## ●年間を通じた話題作

**大河ドラマ『光る君へ』**(NHK、1月7日～12月15日、全48話)は、「源氏物語」を書きあげた紫式部(吉高由里子)を主人公に、平安時代の権力闘争や彼女の恋愛のかたちを描いた。吉高由里子の複雑でありながらまっすぐな心情表現が周囲の登場人物をも輝かせた。平安絵巻のなかに、大河ドラマならではの主人公の人生観を浮かび上がらせ、いくつもの人生を生々しく描いた。(出演=柄本佑、岸谷五郎、矢部太郎、秋山竜次、塩野瑛久、黒木華、高畑充希、ファーストサマーウイカ、三上愛ほか、脚本=大石静、演出=中島由貴、佐々木善春、中泉慧、黛りんたろうほか、制作統括=内田ゆき、松園武大、プロデューサー=大越大土、川口俊介、高橋優香子、葛西勇也、ギャラクシー賞12月度月間賞)

**連続テレビ小説『虎に翼』**(NHK、4月1日～9月27日、全130話)は、連続テレビ小説の110作目。昭和初期に日本で初めて法曹界に飛び込んだ女性を伊藤沙莉が好演した。その口癖は「はて？」だ。当時だけでなく、現在にも通じる女性の置かれた立場や、戦争、国籍や婚姻制度などにある矛盾や格差に、彼女は「はて？」をつきつける。「はて？」は2024年の流行語大賞にノミネートされた。何よりもその思いを迷いなく演じた伊藤の好演が光った。(出演=岡田将生、石田ゆり子、岡部たかし、仲野太賀、森田望智、上川周作、土居志央梨、桜井ユキ、平岩紙、ハ・ヨンスほか、語り=尾野真千子、作=吉田恵里香、演出=柳川善郎、安藤大佑、橋本万葉ほか、制作統括=尾崎裕和、プロデューサー=石澤かおる、舟橋哲男、徳田祥子、主題歌=「さよならまたいつか!」米津玄師、ギャラクシー賞9月度月間賞)

## ●単発ドラマの注目作

2024年は開局記念作品を含め多くの単発ドラマが制作された。脚本家の個性が光る作品をはじめとして、意欲作が目をつけた。

**新春スペシャルドラマ『侵入者たちの晚餐』**(日本テレビ、1月3日)は、『ブラッシュアップライフ』で人気を博したチームが制作したバカリズム脚本のサスペンスコメディだ。家事代行サービス会社で働く亜希子(菊地凜子)、同僚の恵(平岩紙)、その友人の香奈恵(吉田羊)は、顧

客の社長(白石麻衣)が脱税し自宅に大量の金を溜め込んでいるとの噂話から、留守の際に家に侵入し預金を盗み出そうとする。そこで予想外の出来事が次々と起こり物語は二転三転する。スピーディーな展開と登場人物の独特な発想が笑いを呼んだ。(出演=角田晃広、池松壮亮、演出=水野格、チーフプロデューサー=三上絵里子、プロデューサー=小田玲奈、榊原真由子、柴田裕基、鈴木香織、制作協力=AX-ON、東京ドラマアウォード2024単発ドラマアウォード優秀賞)

**『PICU 小児集中治療室 スペシャル 2024』**(フジテレビ、4月13日)は、2022年に放送されたオリジナルの連続ドラマのその後を描く。医療が困難な北海道を舞台に、主人公(吉澤亮)がPICU(小児専門の集中治療室)に配属されて1年後の奮闘を描いた。(出演=安田顕、木村文乃、高杉真宙、高梨臨、大竹しのぶほか、脚本=倉光泰子、演出=平野真、チーフプロデューサー=金城綾香、プロデューサー=栗原彩乃、東京ドラマアウォード2024単発ドラマ部門優秀賞)

**テレビ東京開局60周年特別企画ドラマスペシャル『生きとし生けるもの』**(テレビ東京、5月6日)は、人生に悩む医者(妻木木聡)と余命宣告されたがん患者の成瀬(渡辺謙)が病院を抜け出して人生最後の旅に出るロードムービーだ。共に旅する中、人は何のために生きるのか、何を残すのかという問いと向き合いながら友情が芽生えていく様子が切々と描かれた。(作=北川悦吏子、監督=廣木隆一、チーフプロデューサー=大和健太郎、プロデューサー=祖父江里奈、志村彰、八巻薫、制作協力=The icon、東京ドラマアウォード2024単発ドラマ部門優秀賞)

**テレビ朝日ドラマプレミアム『ブラック・ジャック』**(テレビ朝日、東映、6月30日)連載50周年となる手塚治虫の原作漫画に果敢に取り組み、リアリティをもって映像化した。テレビドラマ化は24年ぶりとなる。法外な治療費と引きかえに神業でどんな手術も成功させる無免許の天才外科医・ブラック・ジャックを高橋一生が、助手のピノコを永尾柚乃が好演した。時代を経て、高額医療、臓器移植や安楽死などの医療の在り方などを改めて問うドラマだった。

(脚本＝森下佳子、監督＝城定秀夫、チーフプロデューサー＝横地郁英、プロデューサー＝飯田サヤカ、齋藤梨枝、島田薫、土井健生、出演＝石橋静河、井之脇海ほか、東京ドラマアウォード 2024 単発ドラマ部門優秀賞)

**特集ドラマ『昔はおれと同年だった田中さんとの友情』**(NHK、8月15日) スケボーが好きな少年・拓人(中須翔真)が神社の管理人をする81歳の戦争体験者・田中さん(岸部一徳)と出会い友情を育む。終戦記念日に放送された。学校で田中さんの体験談を聞く会を描くまでを描く。戦争体験に興味をもつことの大切さを伝えた。(出演＝木村多江、森永悠希ほか、原作＝椰月美智、脚本＝櫻井剛、演出＝川野秀昭、制作統括＝櫻井壮一、プロデューサー＝鈴木航、ギャラクシー賞8月度月間賞)

**テレビ朝日開局65周年記念 ドラマプレミアム『終りに見た街』**(テレビ朝日、9月21日放送)の原作は、1981年に脚本家の山田太一が刊行したものだ。これまでテレビ朝日で2度(1982年、2005年に)映像化され、そのほかラジオ化、舞台化もされている。今回は脚本を宮藤官九郎が手掛け、2024年の現代に舞台を移しての3度目のドラマ化だった。売れない脚本家の田宮(大泉洋)は、テレビ局のプロデューサーから「終戦80年記念スペシャルドラマ」の脚本を無茶ぶりされて資料を読みあさるうちに家族とともに昭和19年の6月にタイムスリップする。東京大空襲の数か月前だ。タイムスリップの仕掛けで現代と過去をしっかりと向き合わせる脚本だった。(出演＝吉田羊ほか、演出＝片山修、エグゼクティブプロデューサー＝内山聖子、プロデューサー＝中込卓也、後藤達哉、山形亮介、和田昂士、制作協力＝角川大映スタジオ、ギャラクシー賞9月度月間賞)

ほかの単発ドラマに**NHKスペシャル 未解決事件**の第10弾となる実録ドラマ**『未解決事件 File.10 下山事件 第1部』**(3月30日、主演＝森山未来、脚本＝安達奈緒子、演出＝梶原登城、制作統括＝松本卓臣、山崎卓臣、山崎啓明、遠藤理史、東京ドラマアウォード 2024単発ドラマ部門優秀賞、ギャラクシー賞3月度月間賞)がある。

## ●配信ドラマの注目作

日本制作の配信オリジナルドラマの注目作には、以下の番組があった。

**Netflix シリーズ『地面師たち』**(7月25日配信、出演＝綾野剛、豊川悦司、北村一輝、小池栄子、ピエール瀧、原作＝新庄耕、監督・脚本＝大根仁)の地面師グループの一人・後藤(ピエール瀧)のセリフ「もうええでしょう」は、2024年の流行語大賞にノミネートされた。地面師たちのかけひきが緊張感をもって描かれた。**Netflix シリーズ『極悪女王』**(9月19日配信、出演＝ゆりやんレトリィバァ、唐田えりか、剛力彩芽、斎藤工、村上淳ほか、企画・プロデュース・脚本＝鈴木おさむ、総監督＝白石和彌、監督＝白石和彌、茂木克仁、脚本＝池上純哉)1970年から80年代にかけて巻き起こった女子プロレスブームの中で活躍した実在のプロレスラー、ダンプ松本をゆりやんレトリィバァが熱演、他の出演者もプロレスラーを演じるにあたって肉体改造をして臨んだ。

ほかに、ラブストーリーの**Netflix シリーズ『さよならのつづき』**(11月14日配信、出演＝有村架純、坂口健太郎、生田斗真、中村ゆりほか、監督＝黒崎博、脚本＝岡田恵和)、主演の賀来賢人が原案の**Netflix シリーズ『忍びの家 House of Ninjas』**(2月15日配信、出演＝江口洋介、木村多江、高良健吾、蒔田彩珠ほか、監督・脚本＝デイヴ・ポイル、脚本＝ほかに山浦雅大、大浦光太、木村綾菜、原案＝賀来賢人、村尾嘉昭、今井隆文)などが注目された。

なかまち・あやこ

日本大学芸術学部教授。「国際ドラマフェスティバル in TOKYO」東京ドラマアウォード審査委員長など放送関連各賞の審査委員を務める。著書に「ニッポンのテレビドラマ21の名セリフ」(弘文堂)ほか。